東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要

—— 1995年度調査(2) ——

1997.3

財団法人　東大阪市文化財協会

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要

—— 1995年度調査(2) ——

1997.3

財団法人　東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市は、古代より栄えた河内の一画を占めています。市内には、旧石器時代以降、各時代の遺跡が現在約130箇所が確認されています。生駒山の山麓には、西ノ辻・鬼塚遺跡・鬼虎川遺跡など、平野部には瓜生堂・山賀遺跡など全国的にも著名な弥生時代の大集落が存在し、原始時代の繁栄の様子を今に示しています。

また、弥生時代だけではなく縄文時代や旧石器時代の遺跡はもとより古墳時代や後の時代の遺跡も数多く存在しています。若江遺跡の中には室町時代の一時期、河内の中の中心である守護所が置かれた若江城跡も存在し、埋蔵文化財の宝庫と言われています。

江戸時代以降は、商都大阪の近郊農村地帯でありましたが、現在市域の大半は住宅・工場などが立ち並びまとまった水田地帯はわずかとなり、市街化が進んでおります。

今回、報告する3件の調査は本協会が平成7年度に実施したものの一部です。報告したそれぞれの調査で、多くの遺構や遺物を確認し、遺跡の実態の一端を明らかにしたものと考えております。

本書が、原始・古代の社会を解明するうえでお役に立てれば幸いであります。また、地域の文化財の学習資料となりますことを願っております。

最後になりましたが、調査および整理を実施するうえに、多大なご協力をいただきました関係機関、各位に心より謝意を表します。

財団法人　東大阪市文化財協会
理事長　日吉　丘

本文目次

第１章　若江遺跡第59次発掘調査概要

1　はじめに …… 1

2　調査の概要 …… 2

1）基本層序 …… 2

2）16世紀の若江城の南北堀 …… 2

3）その他の16世紀の若江城の遺構 …… 3

4）調査区東部の中世遺構群 …… 3

5）調査区東部の古代遺構群 …… 3

6）弥生時代の遺構 …… 3

3　おわりに …… 3

第２章　若江遺跡第60次発掘調査概要

1　調査に至る経過 …… 13

2　位置と環境 …… 14

3　調査の概要 …… 16

1）地区割り …… 16

2）層位 …… 16

3）遺構 …… 17

4）出土遺物 …… 19

4　まとめ …… 23

第３章　芝ヶ丘遺跡第８次発掘調査概要

1　調査に至る経過 …… 25

2　位置と環境 …… 25

3　調査の方法 …… 26

4　層位 …… 26

5　遺構 …… 26

6　遺物 …… 26

7　まとめ …… 27

挿図目次

(若江遺跡第59次発掘調査)

第1図　若江遺跡第59次発掘調査調査地位置図 …… 5
第2図　16世紀の遺構 …… 6
第3図　近世耕作面（下面） …… 7
第4図　近世後半から近現代耕作面（上面） …… 8
第5図　調査区東部中世遺構群 …… 9
第6図　調査区東部古代遺構群 …… 10
第7図　SE05断面図 …… 11
第8図　弥生時代の遺構 …… 11
第9図　出土遺物 …… 11
第10図　若江遺跡第59次発掘調査出土遺物 …… 12

(若江遺跡第60次発掘調査)

第11図　調査地位置図 …… 13
第12図　遺跡周辺図 …… 15
第13図　地区割図 …… 16
第14図　断面図 …… 17
第15図　A地区遺構平面図 …… 18
第16図　B地区遺構平面図 …… 18
第17図　C地区遺構平面図 …… 19
第18図　D地区遺構平面図 …… 19
第19図　A地区出土遺物 …… 21
第20図　B地区出土遺物 …… 22
第21図　C・D・E地区出土遺物 …… 23

(芝ヶ丘遺跡第8次発掘調査)

第22図　調査地位置図 …… 25

第23図　土層断面図 …… 27
第24図　検出遺構平面図 …… 28
第25図　石組暗渠平面実測図 …… 28
第26図　土管暗渠平面実測図 …… 29
第27図　土管実測図 …… 29
第28図　出土遺物実測図 …… 30

表目次

（芝ヶ丘遺跡第８次発掘調査）

表１　芝ヶ丘遺跡第８次調査出土遺物観察表

図版目次

図版１　若江遺跡第59次調査　１．南北堀東肩部（築造時・南西から）
２．南北堀東肩部（築造時・北から）
３．南北堀東肩部（西から）
図版２　若江遺跡第59次調査　４．土橋（築造時・東から）
５．土橋（築造時・東から）
６．現地説明会風景
図版３　若江遺跡第59次調査　７．南北堀東肩部（築造時・北西から）
８．肩部細部（廃絶時・北西から）
９．南北堀中央部（廃絶時・南東から）
図版４　若江遺跡第59次調査　10．南北堀東肩部（廃絶時・西から）
11．南北堀東肩部細部
12．南北堀東肩部　折敷出土状況
図版５　若江遺跡第59次調査　13．南北堀東肩部　櫛出土状況
14．南北堀東肩部　曲物出土状況

15. 南北堀東肩部　かけや？出土状況

図版６　若江遺跡第59次調査　16. 南北堀東肩部　壁下地出土状況

17. 南北堀東肩部　むしろ状製品出土状況

18. 南北堀東肩部　軒丸瓦出土状況

図版７　若江遺跡第59次調査　19. 南北堀東肩部　軒平瓦出土状況

20. 南北堀東肩部　土師器皿出土状況

21. 南北堀東肩部　土師器皿出土状況

図版８　若江遺跡第59次調査　22. 堀内堆積層中　自然木出土状況

23. 堀南壁断面

24. 堀南壁断面　東肩部

図版９　若江遺跡第59次調査　25. 調査区西部　調査風景

26. 調査区西部　SD01・SE01・南北堀西肩

27. SE01土部断面

図版10　若江遺跡第59次調査　28. 耕作面下面西部及び水路検出状況

29. 堀内近世堆積層中　瓦集中部

30. 耕作面下面東部（南から）

図版11　若江遺跡第59次調査　31. 耕作面下面　畦道（東から）

32. 耕作面下面　耕作痕の溝

33. 耕作面上面東部（南西から）

図版12　若江遺跡第59次調査　34. 耕作面上面北部（東から）

35. 近現代面（東から）

36. 防空壕生面（西から）

図版13　若江遺跡第59次調査　37. 調査区東部　中世遺構群（南から）

38. SE02上部（東から）

39. SE02下部（北から）

図版14　若江遺跡第59次調査　40. SE03下部（北から）

41. SE04上部（南から）

42. SE05下部（北から）

図版15　若江遺跡第59次調査　43. SE05上部断面（西から）

44. 古代遺構群（東から）

図版16　若江遺跡第59次調査　45．古代遺構群（北から）

46．古代遺構群　中央部（東から）

47．古代遺構群　柱穴断面

図版17　若江遺跡第59次調査　48．柱穴内　土器出土状況（南から）

49．柱穴内　土器出土状況

50．弥生後期　水田（北から）

図版18　若江遺跡第59次調査　51．弥生後期　水田畦畔（西から）

52．弥生後期　SD02（西から）

53．SD02内足痕

図版19　若江遺跡第60次調査　1．A地区北壁断面

2．A地区遺構全景

3．A地区井戸

図版20　若江遺跡第60次調査　4．A地区井戸内　遺物出土状況

5．B地区東壁断面

6．B地区落込み

図版21　若江遺跡第60次調査　7．C地区遺構全景

8．D地区遺構全景

9．D地区井戸　実測風景

図版22　若江遺跡第60次調査出土遺物　土師器皿・羽釜・瓦器椀・須恵器提瓶・平瓶

図版23　若江遺跡第60次調査出土遺物　A地区出土　須恵器台付壷・肥前陶器椀・

青磁碗・土師器高杯

図版24　若江遺跡第60次調査出土遺物　中国製青花・肥前陶器・軒丸瓦・軒平瓦・

土師器皿・台付要脚台

図版25　若江遺跡第60次調査出土遺物　1．瓦器椀

2．擂鉢・こね鉢

図版26　若江遺跡第60次調査出土遺物　1．円筒埴輪・形象埴輪

2．須恵器壷・甕

図版27　若江遺跡第60次調査出土遺物　1．土師器皿

2．瓦器皿・羽釜

図版28　若江遺跡第60次調査出土遺物　1．擂鉢

２．土師器皿・甕

図版29　若江遺跡第60次調査出土遺物　１．擂鉢・こね鉢・瓦器椀

２．砥・砥石・円盤状土製品

図版30　芝ヶ丘遺跡第８次調査　１．調査地全景（北から）

２．調査地全景（東から）

３．調査風景

図版31　芝ヶ丘遺跡第８次調査　１．西壁断面

２．南壁断面

３．南壁断面

図版32　芝ヶ丘遺跡第８次調査　１．石組暗渠（東から）

２．石組暗渠（東から）

３．石組暗渠（石組抜取後）

図版33　芝ヶ丘遺跡第８次調査　１．土管暗渠上面（東から）

２．土管暗渠

３．土管暗渠（北から）

図版34　芝ヶ丘遺跡第８次調査出土遺物　瓦器椀

図版35　芝ヶ丘遺跡第８次調査出土遺物　１．磁器碗・須恵器杯・蓋

２．羽釜

図版36　芝ヶ丘遺跡第８次調査出土遺物　土師器皿・羽釜・土管

第１章　若江遺跡第59次発掘調査概要

１はじめに

若江遺跡は、河内平野のほぼ中央部、現在の東大阪市若江北町・若江本町・若江南町一帯にひろがる弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。遺跡は楠根川などによって形成された自然堤防上の微高地に位置し、現在の標高はT.P.+5m前後を測る。周辺には縄文時代から室町時代にかけて大きな調査成果をあげている山賀遺跡・巨摩廃寺遺跡や弥生時代の大規模な方形周溝墓が発見された瓜生堂遺跡等がある。

これまでの調査によって、若江遺跡では、室町時代から織豊期にかけての城郭遺構である若江城跡の堀や建物が検出され、先行する鎌倉時代頃の集落の様相も明らかになりつつある。また、遺構は確認されていないが、若江廃寺や若江郡衙の存在が推定されている。さらに下層では弥生時代の水田や方形周溝墓が検出され、周辺遺跡との関連が注目される。

今回、奥野正枝氏によって共同住宅の建設が若江北町３丁目57番地他において計画された。建設予定地は若江遺跡の範囲内に所在するため、東大阪市教育委員会文化財課によって、工事着手以前に試掘調査が実施された。その結果、土師器等を含む室町時代包含層が確認され、事前調査の必要が指摘された。また、これまでの調査結果から若江城の堀が存在することが指摘されていた[1]。このため市教育委員会文化財課と関係機関の協議の結果、奥野氏の委託を受けた財団法人東大阪市文化財協会が発掘調査を実施することなった。

調査は近現代の堆積層を機械によって掘削し、以下を層位ごとに人力で掘削した。その結果、近世から近代の耕作面２面と16世紀の若江城の堀を検出し、廃絶時の状態で写真測量を行うとともに、現地説明会を４月15日に開催した。その後、堀築造時の調査をすすめ、若江城本丸部分の調査、弥生時代遺構面の調査を一部実施し終了した。現地説明会の参加者は約 350名におよんだ。＜調査期間は1995年２月20日から５月22日、面積は約500㎡である。＞

調査で使用した水準高はT.P.値、方位は国土座標第Ⅳ系を基準とし、基準杭の設置はワールド航測株式会社に委託した。土色名は農林水産省農林水産技術会事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。

調査の体制は次のとおりである(1997(平成９)年１月末現在)。

財団法人東大阪市文化財協会理事長　　日吉 亘(東大阪市教育委員会教育長)

同　　常務理事　柏谷祐臣

同　　事務局長　杉山浩三(東大阪市教育委員会文化財課主幹)

同　　庶務部長　同 上　兼務

同　　整理部長　福永信雄(東大阪市教育委員会文化財課主査)

同　　調査部長　李本隆裕(東大阪市教育委員会文化財課主査)

以下に調査結果を略述する。

２調査の概要

１）基本層序

調査区内の基本的層序は以下のとおりであった。現地表はT.P.+4.5m前後を測る。

第１層　撹乱及び盛土層。

第２層　暗褐色砂混砂質シルト層。中世の遺物包含層で、土師皿、羽釜、瓦器、須恵器、土師器、瓦等を含む。上下２層に分かれるようである。

第３層　黄色粘質シルト～細砂層。これまでの調査結果からみて、弥生時代後期から古墳時代前期の流水による堆積層と考えられる。中世の遺構群と古代の遺構群はこの上面で検出した。

第４層　青灰色中粒砂～粗砂層。一部では黄色を呈する。周辺の調査結果から、弥生時代中期から後期の流水による堆積層と考えられる。

第５層　緑灰色粘土層。第４層と同様の堆積層と考えられる。第３層以下の各層からは土器の出土をみていない。

第６層　黒色粘土層。弥生時代後期の遺物包含層と考えられ、上面は水田面と考えられる。

２）16世紀の若江城の南北堀

堀の規模は東西の幅約25m、深さ約３mを測る。南北の長さ約25m分を検出した。堀自体は素堀りで、石垣や杭等の施設は検出されなかった。底から約70cm付近に幅約２mのテラス状の平坦部分が存在する。底から平坦部付近までは、ととのった形であるが、平坦部より上方の平面は凸凹を残し、傾斜もやや緩やかである。ただし、本丸にあたる東側上部の約１mは垂直に近い傾斜をもつ。

堀内の堆積は大きく４層に分けられる。下層から順に次のとおりであった。

第１層　築造時から廃絶時までの自然堆積層。本層は肩部の明瞭なラミナが観察される中粒砂層と中央部の細砂質シルト～粘土層に二分される。堀底から現在も湧水がみられることから、水が溜まり、かつ流れていたと考えられる。出土遺物には土師質、備前壺、瀬戸美濃系皿、明染付、丸平瓦、曲物、漆椀等があり、肩部の中粒砂層では堆積した砂よりも遺物の量が多いほどであった。

第２層　廃絶時の埋土層。本層は大量の粘土ブロックや砂を含む人為的な整地層である。大量の瓦、自然木、むしろ状の編み物、土器等が出土している。南部東側の肩部には完形の瓦が多く、隅櫓もしくは築地塀の存在が推定される。今後の整理作業の結果によるが、軒瓦の形式が２種類程度に集中していることから、本丸内の各建物に使用されていたものをまとめて廃棄したとは考えにくい。

第３層　近世の埋土及び耕作土層。特徴は第２層と同様である。近世後半から近現代の耕作面と近世の耕作面の上下２面を検出している。

第４層　近現代の埋土層。特徴は第２層と同様であるが、より汚れた感がある。本層の堆積によってこの堀は完全に埋まり、初めて本丸と周囲は平坦な地形となった。堀の底にベース層を掘り残す幅約３m、高さ約50cmの高まりを長さ約４m分検出した。断面が台形で上部が平坦なことから通路として機能していたと考えられる。柱の跡や基礎の跡は検出されなかったが、上面は固く、乾根状のひび割れがみられた。以上のことから高まりは土橋と推測される。若江小学校体育館建設に伴う調査でも同様の遺構が検出されている[2]。

３）その他の16世紀の若江城の遺構

調査区西部の前述の南北堀の西方で東西方向の素堀溝を検出した(SD01)。幅は約 2.5m、深さ約１mで、約４m分を測る。第41次調査で検出したものの延長と考えられ、土師器皿、釜、瓦類等が大量に出土した[3]。この溝と南北堀に重複する形で井戸を１基検出した(SE01)。井戸は上下２段の桶を井戸枠とするもので、上段の桶の上端と下端には石や瓦が１段組まれていた。掘方は方形を呈する。枠内の

埋土や掘方の埋土から瓦類や土師質皿、釜等が出土している。これらの遺構の新旧関係はSD01→SE01→南北堀と考えられる。

4）調査区東部の中世遺構群

16世紀の堀による撹乱を受けていない部分では井戸や土壙、溝、柱穴を検出した。井戸の多くは円形の掘方と曲物の枠をもつ。掘方や枠内から土師質皿や瓦器碗等が出土した。柱穴は柱痕跡が残る掘方が隅丸方形のものが多いが、建物に復原できるものはない。これらの遺構は出土遺物から平安時代後半から室町時代前半にかけてのものと推定される。

5）調査区東部の古代遺構群

上記の遺構群の下層に大量の柱穴や土壙を検出した。現場調査中に建物を復原できたものはない。遺構群からは土師器や須恵器、製塩土器等が出土している。これらの遺構は出土遺物から古墳時代から平安時代前半にかけてのものと推定される。

6）弥生時代の遺構

調査区の北東隅の16世紀の堀に撹乱されていない部分で弥生時代の遺構面の調査を行った。調査区東部全体も調査する予定であったが、雨天による地盤軟弱化のため中止した。検出した遺構には畦畔や溝がある。土器は出土していないが、周辺の調査結果から弥生時代後期の水田跡と考えられる。

3 おわりに

ここでは16世紀の若江城廃絶後を時間の経過を追うことでまとめとしたい。

若江城は文献史料から織田信長が石山本願寺を降したことから、不要となり1581（天正９）年頃には存在しなかったと、されている[3]。廃絶時には本丸の上部構造物と土砂をもって堀を深さ半分程度まで埋立て放置されていたと思われる。

17世紀頃には、堀はこの状態のまま、もっとも深い中央部分は水路として使われていたようである。堀であった部分は本丸であった部分から約１ｍ低く、緩やかな段となっていたことが推定される。水路の最下層には黄色中粒砂から細砂が堆積し、拳大の礫や瓦、伊万里、唐津等が集中していた。廃棄されたものではなく、排水を目的とした構造物であると考えている。墨書された唐津の碗底部片が出土している。

18世紀頃には、本丸であった部分も堀であった部分も畑として利用され、17世紀の水路は規模が小さくなりながらも引き続き使用されていたと思われる。耕作痕と思われる溝状遺構の幅が広いことから畑とした。土橋であった部分には方向を違えるものの土手状の遺構が造成される。土手状遺構の北側に明瞭な耕作痕が検出されないことから、池か沼状の湿地であった可能性が高い。ただし明確な掘りこみ等は認められなかった。土手状遺構は大畦畔と称すべきであろうが、上端の幅が広いことから畦道とした。

19世紀頃には、さらに土を埋め田畑として利用されていた。本丸部分との段差は約50cmまで埋まっている。畦道は続けて利用され、たびたび土が盛られて高くなっていったようである。南側には側溝を伴う。耕作痕跡である溝の形状や規模が前代と異なることから、水田として利用していた可能性が高い。水路は確認できないが引き続き使用されていたと想像される。

近代以降、あるいは昭和に入って盛土を行い、家屋が建てられたと思われる。本丸部分と堀であっ

た部分の段差は完全に無くなり平坦となる。この盛土中からは化粧水用のガラスびんや室町時代の石仏(阿弥陀如来像)が出土している。2基の井戸はこの家屋に伴うものと考えられる。水路は調査区の中央部で直角に折れるように付け替えられ、現在では暗渠となっている。畦道は盛土によって埋められ消滅する。調査区北端には石組の護岸を伴う池が築造され、現在は奥野邸の庭の池となっている。

なお、調査地内には第2次世界大戦中のものと考えられる防空壕が遺存していたため、略測と写真撮影を行った。

今回の調査では現代から弥生時代に至る各時代の遺構や遺物を検出することができた。得られた資料は膨大なもので、当地が若江遺跡の中心部であることをうらづけるものである。整理作業には文献史料との比較検討や木製品の樹種鑑定等が必要であり、若干の時間を要するであろう。

安土城や大坂城等の安土桃山時代の調査研究が全国的な進展を見せている現在では、河内国の中心的な城郭である若江城の報告は急務である。整理作業の進展が期待されるが、現在では力が及ばず、調査委託者である奥野氏をはじめとするご協力をいただいた関係者各位に対し、おわび申し上げる他はない。

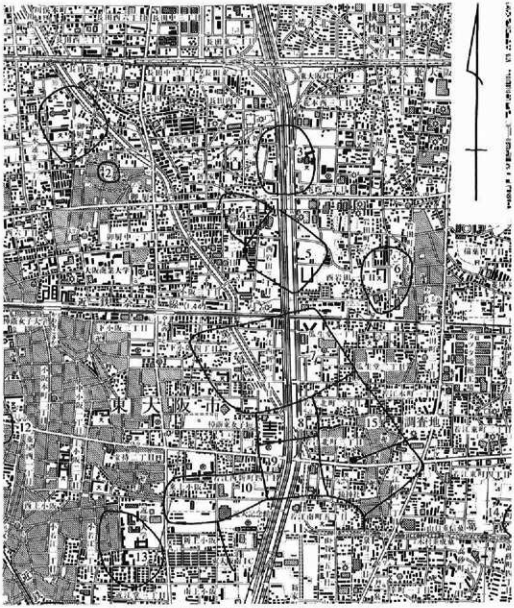
注)

(1) 財団法人東大阪市文化財協会『若江遺跡第27次発掘調査報告』1988

(2) 財団法人東大阪市文化財協会『若江遺跡第38次発掘調査報告』1993

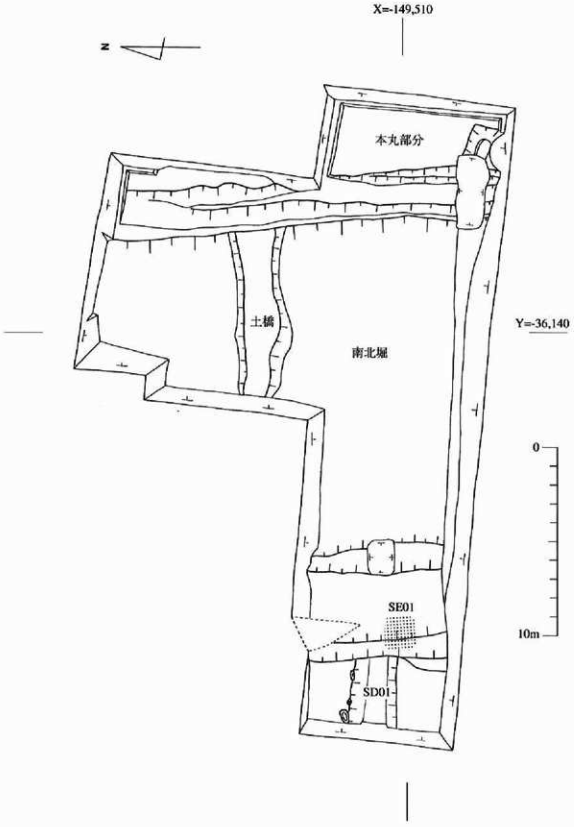
(3) 第41次調査は本報告
調査地に西接する南北道路では下水道管渠築造工事に伴う第52調査が実施されSD01を断面で確認している。
財団法人東大阪市文化財協会「第12章　参考資料・若江遺跡第52次調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告ー1992年度ー』

(4) 財団法人東大阪市文化財協会『若江遺跡第25次発掘調査報告』1987
ルイス＝フロイス『日本耶蘇会年報』

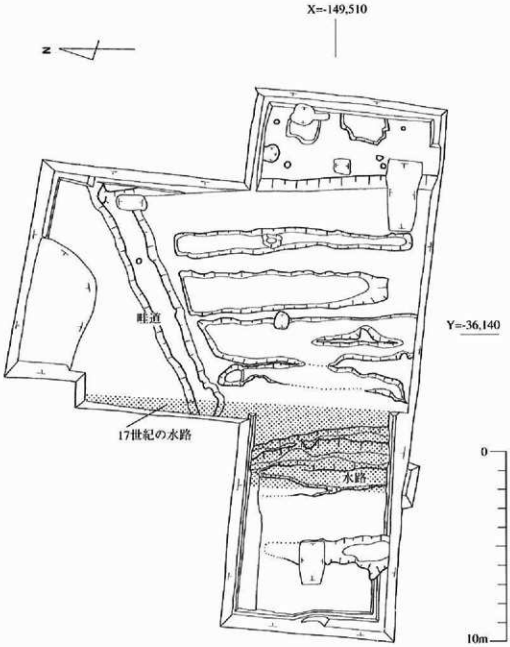


第1図　若江遺跡第59次発掘調査調査地位置図（S＝1/25000）

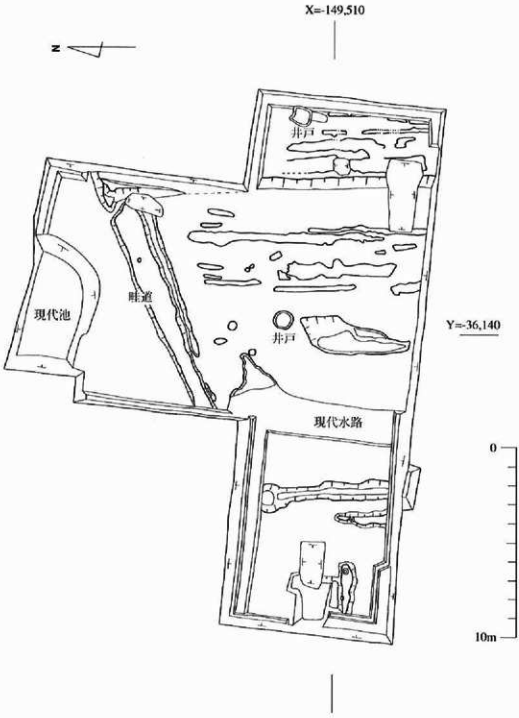
1．西堤遺跡　2．薬師寺跡　3．新家遺跡　4．意岐部遺跡
5．西岩田遺跡　6．岩田遺跡　7．瓜生堂遺跡　8．巨摩廃寺遺跡
9．若江北遺跡　10．上小阪遺跡　11．山賀遺跡　12．横沼遺跡
13．小若江遺跡　14．玉串遺跡　15．若江遺跡



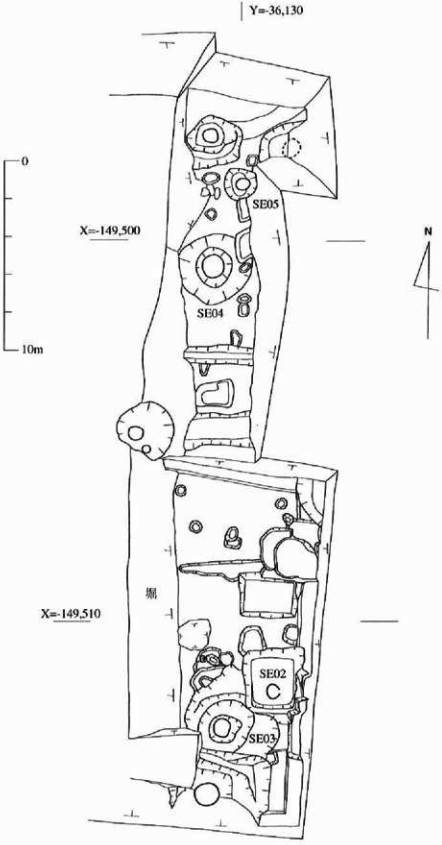
第2図　16世紀の遺構（S=1/200）



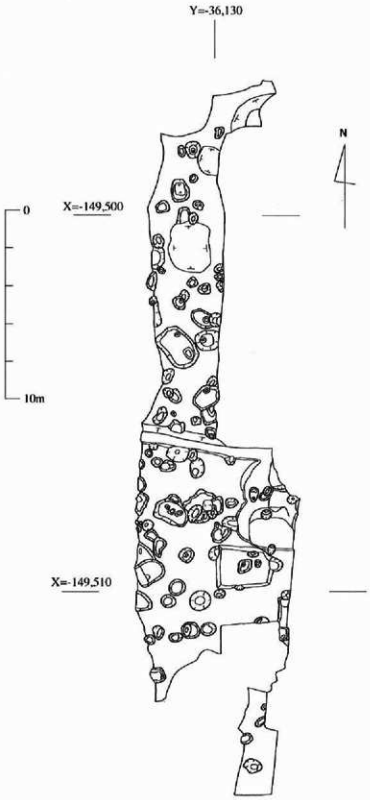
第3図　近世耕作面(下面)(S=1/200)



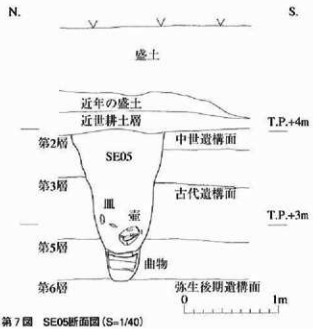
第4図　近世後半から近現代耕作面(上面)(S=1/200)



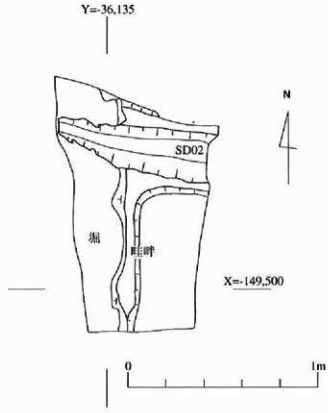
第5図　調査区東部中世遺構群（S=1/100）



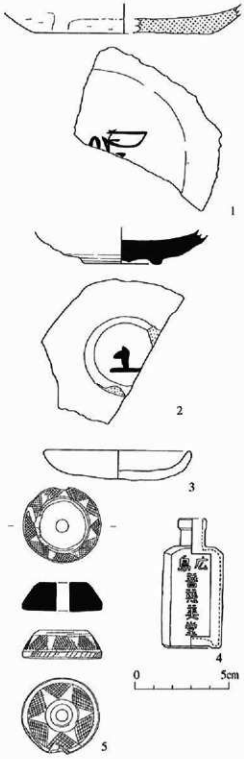
第6図　調査区東部古代遺構群（S=1/100）



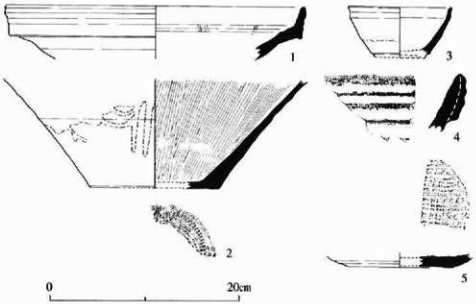
第7図　SE05断面図 (S=1/40)



第8図　弥生時代の遺構 (S=1/100)



第9図　出土遺物 (S=1/2)
1：南北堀第3層出土須恵質土器底部
2：17世紀の水路出土唐津碗底部
3：SE03出土土師皿
4：南北堀第4層(近現代)出土ガラス瓶
5：撹乱出土石製紡錘車



第10図　若江遺跡第59次発掘調査出土遺物２（S＝1/4）

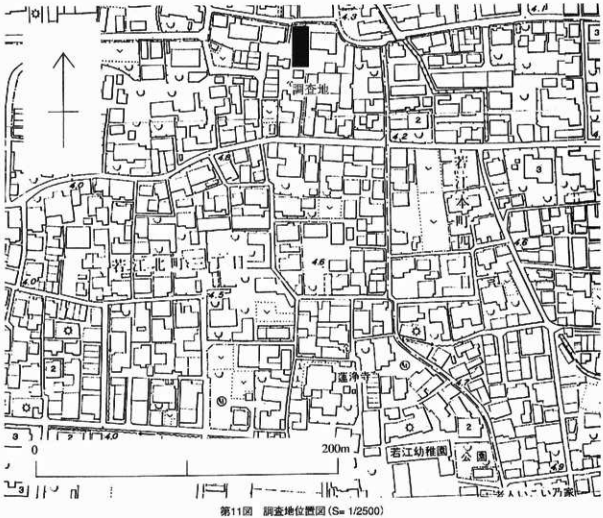
1：備前すり鉢（南北堀第２層中）
2：陶器（信楽？）すり鉢（南北堀第２層中）
3：瀬戸天目（南北堀第２層中）
4：備前大甕（南北堀第２層中）
5：瀬戸おろし皿（南北堀第２層中）

第2章　若江遺跡第60次発掘調査概要

1　調査に至る経過

東大阪市若江本町・若江北町・若江南町一帯には弥生時代から江戸時代に至る若江遺跡が広がっている。当遺跡は昭和９年の第２寝屋川改修工事の際に弥生時代～中世の土器が出土して注目されるようになり、昭和47年に若江小学校含増築工事に伴い第１次発掘調査を実施して以来、道路拡幅・ガス管埋設・共同住宅建設等に伴って、とくに平成２年度以降は若江地区で集中的に下水道埋設工事がなされ、これまでに59次におよぶ発掘調査が行なわれてきた。

今回、若江遺跡内の若江北町３丁目683で共同住宅建設の計画がもちあがり、東大阪市教育委員会が平成６年10月４日および11月29日に予定地内で試掘調査を実施したところ、室町時代後期の若江城を取り囲む堀と思われる遺構を検出し、当該期の遺物も多量に出土した。このため共同住宅建設に先立つ事前の発掘調査が必要との見解が教育委員会より原因者に示され、協議を重ねることとなった。その結果、杭打ちによりて埋蔵文化財が影響を受ける地点を中心に５トレンチ、合計面積84㎡（第11～13図）を対象とした若江遺跡第60次発掘調査を、財団法人東大阪市文化財協会が委託を受けて実施することとなった。なお現場調査は平成７年５月17日から６月８日まで（実働15日）行なった。



第11図　調査地位置図（S＝1/2500）

2　位置と環境

若江遺跡は東大阪市若江本町・若江北町・若江南町一帯に東西700m、南北101mの範囲で広がる弥生時代から江戸時代に至る複合遺跡である。河内平野のほぼ中央に位置し、標高4～5mの自然堤防上に立地している。

本遺跡周辺に集落が形成され始めるのは、河内湾が旧大和川の堆積作用によって潟から湖へと変化する縄文時代晩期から弥生時代前期頃と考えられている。南に接する山賀遺跡では縄文時代晩期の遺物包含層や足跡、弥生時代前期の掘立柱建物等が検出されている[1]。北に接する瓜生堂遺跡も前期には集落が形成されたようで、中期の方形周溝墓等が確認されている[2]。若江遺跡では府道大阪東大阪線沿いに弥生時代後期の方形周溝墓、水田畦畔が検出されており[3]、中期に遡ると思われるピットも確認されている[4]。

古墳時代にはいると河内湖の汀線は大きく北へ後退し、前期には西岩田遺跡にも集落が形成される[5]。また中期には巨摩廃寺遺跡・山賀遺跡で古墳が造成される[6]。若江遺跡では南部で前期のピット[7]、府道大阪東大阪線沿いで中期～後期の溝・土壙等が確認されている[8]。

奈良時代にはいると、和銅2年（709）「弘福寺田畠渡記帳」[9]を初見として明治時代初期まで「若江郡」が存続していること、元慶年間（877～885）の「尊意贈僧正伝」[10]以後、文明14年（1482）写筆の「長禄記」[11]まで郡寺と思われる「若江寺」が文献上散見されることから、当遺跡内に郡衙が創建されたものと推測されている。

瓜生堂遺跡では平安時代前期の井戸が確認されているが[12]、現在のところ当遺跡では奈良時代～平安時代前期の遺物は出土するものの、若江郡衙・若江寺関連をはじめ律令制度下の当該期の遺構は確認されていない。

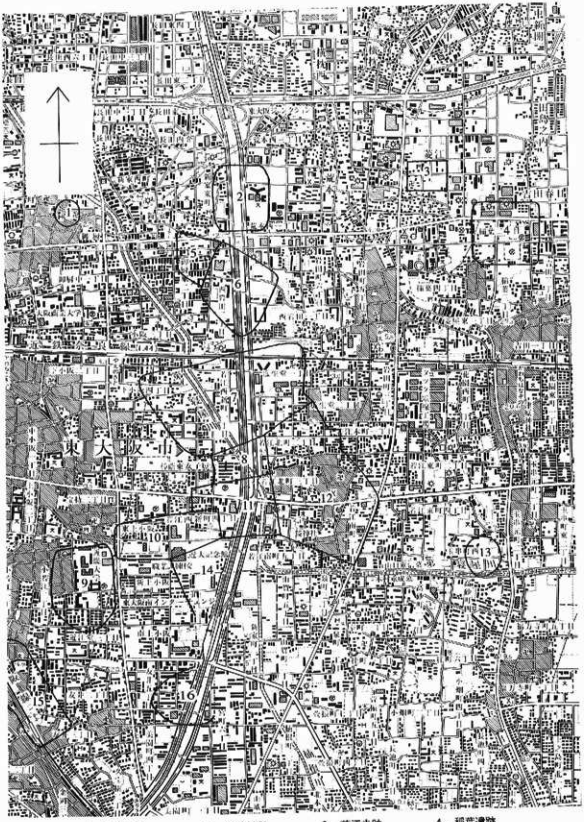
若江城は「河内志」[13]および「津川本畠山系図」[14]から南北朝期に築かれたと考えられており、以後当城は河内国守護畠山氏の守護所となった[15]。その後畠山政長と義就間の家督相続をめぐる若江城争奪戦は、文正2年（1467）上御霊社での合戦に山名宗全・細川政元以下の諸領主をまきこみ応仁の大乱へと発展していった。この間に守護所としての機能は高屋城に移転していったと考えられている。

足利義昭を奉じて入京した織田信長が永禄11年（1568）に畿内を平定すると、若江城主三好義継は河内国北半の守護となり、当所はふたたび守護所となった。しかしその後まもなく信長と対立し、天正元年（1573）7月槙嶋城の戦いで破れた義昭は羽柴秀吉の警固のもと義継の若江城へはいり、堺を経て紀州へ渡り室町幕符は終わりを告げた。

同年11月に三好義継を攻め滅ぼした信長は多羅尾綱知・池田教正・野間左吉の若江三人衆に若江城を預け置き、信長自身も石山本願寺攻めの際にしばしば宿所とした。天正8年（1580）8月2日石山合戦の終結後、12月16日までに若江城は織田信長によって破却されたと推測されており、翌年のルイス・フロイスの「若江の中央を通ったが、此所には今城もなく、唯多数の住民が居る町のみがあった」[16]との書翰はそれを傍証している。

「長禄寛正記」にみられる「口二ツニ拵ヘ、所々ヲ掘切テ掻楯ヲカキ。逆茂木ヲ引待カケ。」[17]といった若江城の城郭構造が、近年の発掘調査による堀・土塁・逆茂木・石垣・土橋・塼立建物などの城郭関連遺構の検出で明らかになりつつある[18]。現在のところ若江城の本丸は、若江幼稚園付近と考えられている。

以後若江は幕府によって村方として掌握され、寛永21年（1644）の家数改めでは224戸におよび[19]、大集落を形成していた。



1．瓢箪寺跡　2．新家遺跡　3．若江寺跡　4．稲葉遺跡
5．意岐部遺跡　6．西岩田遺跡　7．瓜生堂遺跡　8．巨摩廃寺遺跡
9．小若江遺跡　10．上小阪遺跡　11．若江北遺跡　12．若江遺跡
13．玉串遺跡　14．山賀遺跡　15．弥刀遺跡　16．友井遺跡

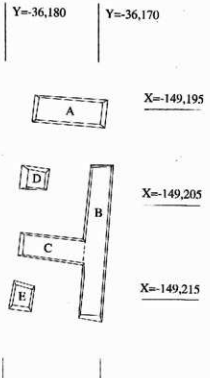
第12図　遺跡周辺図（S＝1/25000）

3　調査の概要

1）地区割り

調査地は東大阪市若江北町３丁目683地内であり、建設省の告示による国土座標第Ⅵ系のＹ=-36,170～-36,180、Ｘ=-149,150～-149,220の範囲におさまっている。

ここに共同住宅の建設に伴い埋蔵文化財に支障をきたす部分について、第13図のようなＡ～Ｅ地区と仮称する５調査地区が設定された。それぞれの面積はＡ地区22㎡、Ｂ地区35.2㎡、Ｃ地区17.6㎡、Ｄ地区4.4㎡、Ｅ地区4.4㎡であり、Ａ地区は井戸枠取り上げのために一部を北輔へ約１ｍ拡張した。

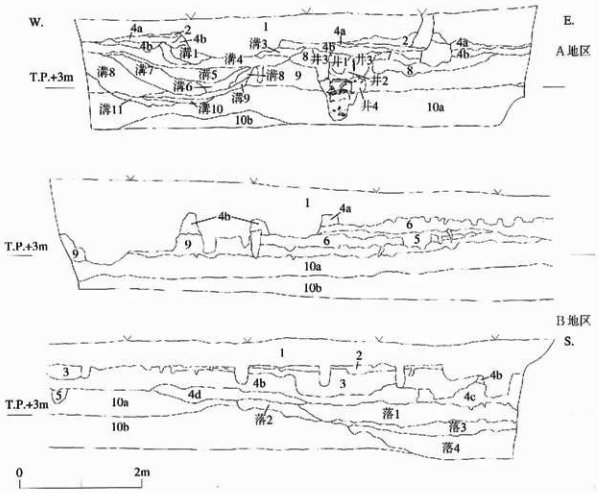


第13図　地区割図（S=１/400）

2）層位

調査地の地層は大きく９層に分れる。第３層は若江遺跡で広く認められる古墳時代前期の堆積層を利用した近世の整地層。第４層は第20図25等近世の遺物を包含する整地層で、上面で近世～近代に至る遺構が検出された。第５層は鎌倉時代～室町時代頃の整地層。第６層は第３層と同質の整地層で平安時代～鎌倉時代頃に属するものと思われる。第７・８層は平面では検出されず、Ａ地区北壁断面にのみ認められたことから平安時代頃の遺構埋土の可能性がある。第９層は第19図17～23の古墳時代～奈良時代までの遺物を包含する。中世の遺構は第６・７・９層上面で検出された。第10層は古墳時代前期の河道内堆積層と思われ、第19図24、第20図48・49等の遺物が少量出土した。

第１層　盛土・近代遺構埋土
第２層　2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂～中礫混じりシルト　炭化物微量混じる
第３層　2.5Y5/3黄褐色シルト～粘土
第４ａ層　中粒砂～細礫混じり粘土
第４ｂ層　2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂～中礫混じり粘土
第４ｃ層　中粒砂～細礫混じり粘土
第４ｄ層　10YR3/2黒褐色粘土混じり細粒砂～中礫　炭化物微量混じる
第５層　10YR3/3黒褐色粘土混じり細粒砂～中礫
第６層　2.5Y5/3黄褐色シルト～粘土
第７層　2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～中礫混じり粘土
第８層　2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂～中礫混じり粘土
第９層　2.5Y5/3黄褐色粘土混じり中粒砂～中礫　鉄分沈着
第10ａ層　10YR4/4褐色細粒砂～中礫
第10ｂ層　2.5Y5/4黄褐色細粒砂～中礫
溝１層　10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～中礫混じり粘土
溝２層　10YR4/4褐色粘土粗　粒砂～中礫微量混じる
溝３層　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土　粗粒砂～中礫微量混じる
溝４層　2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂～中礫混じり粘土
溝５層　2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～中礫混じり粘土
溝６層　2.5Y4/2暗灰黄色粘土　極粗粒砂～中礫微量混じる
溝７層　2.5Y3/2黒褐色細粒砂～中礫混じり粘土
溝８層　2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～中礫混じり粘土
溝９層　2.5Y4/1黄灰色細粒砂～中礫混じり粘土
溝10層　5Y4/2灰オリーブ中粒砂～中礫混じり粘土
溝11層　2.5Y3/2黒褐色細粒砂～中礫
井戸１層　2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂～中礫混じり粘土
井戸２層　2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～中礫混じり粘土
井戸３層　2.5Y4/2暗灰黄色粗粒砂～中礫混じり粘土
井戸４層　2.5Y5/3黄褐色粘土混じり細粒砂～中礫
井戸５層　10YR4/4褐色細粒砂～中礫
落ち込み１層　2.5Y3/2黒褐色中粒砂～中礫混じり粘土
落ち込み２層　2.5Y5/2暗灰黄色粘土混じり細粒砂～中礫
落ち込み３層　2.5Y3/1黒褐色粘土混じり中粒砂～中礫
落ち込み４層　10Y4/1灰色粘土　中粒砂～極細粒砂のラミナ混じる　植物遺体混じる



第14図　断面図(S= 1/60)

3）遺構

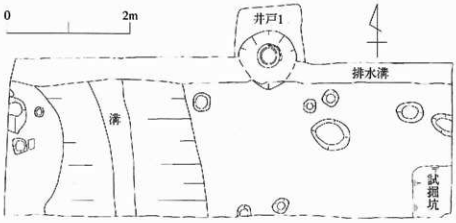
A地区

中世の井戸1基、溝1条、ピット11個を第7・9層上面で検出した。

溝は幅360cm以上、深さ100cmで南北方向に延びる。C地区の溝1に連なるものと思われる。その場合A地区では溝底部の標高がT.P.2.74mであるのに対しC地区ではT.P.2.82mと高いことから、この溝は南方のA地区から北方のC地区に流れていたと思われる。第19図7の土師器皿の出土から室町時代後期に使用されていたと推測できる。

井戸は直径78cm、深さ76cmの堀方に口径28cm程度の土師器羽釜を少なくとも6段は積み上げて井戸枠としていたことを現場調査で確認できた。しかし6段目の土師器羽釜から堀方底部までに32cmの空白域があったこと、井戸の底部から土師器羽釜の破片が多量出土したことから、本来井戸枠がもう1段か2段存在したことが推測できる。井戸枠に使用されていた土師器羽釜にはあまり時期差はみられず、4段目のもの第19図6に図示した。第19図1・2の土師器皿の出土からこの井戸は鎌倉時代に使用されたものと思われる。

ピットは最小で直径13cm、最大で直径45cmまでのものが検出されたが深さは25cm以下と浅い。今回の調査でピットが広い範囲にわたって確認されたのはA地区だけであるが、ピット内から時期を決定できるような遺物の出土はなく、また建物等も復元できずその性格は不明である。



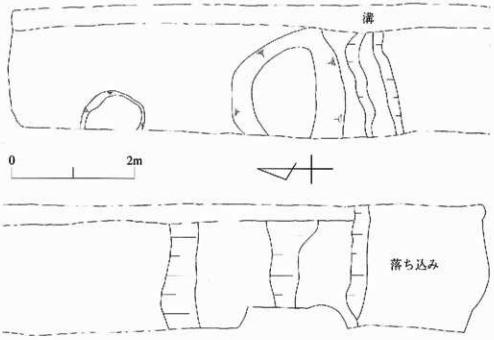
第15図　A地区遺構平面図（S＝1/60）

B地区

第4層上面で近世～近代に至るピット・土壙、第6・9層上面で中世～近世の溝1条・落ち込みを検出した。

溝は幅40～60cm、深さ30cmで東西方向に延びる。出土遺物から鎌倉時代頃に使用されたものと思われる。

落ち込みは幅600cm以上、深さ110cm以上あり3段に掘り込まれた北肩が検出された。B地区もほぼ同様の堆積状況にあることから、この落ち込みは東西方向の長さ9.5m以上におよぶ。落ち込み内からは第20図26等江戸時代の遺物が出土しており、中世の堆積層は確認されなかった。しかし比較的大規模な遺構であることから、若江城の堀の一部が天正8年(1580)の城郭破却のさいに埋められずに、近世には水路として利用されたのがこの落ち込みであった可能性がある。その場合、若江城本丸跡地に比定されている若江幼稚園から直線距離で約400m離れていることから、城内と城下を分かつ北側の外堀になるものと思われる。



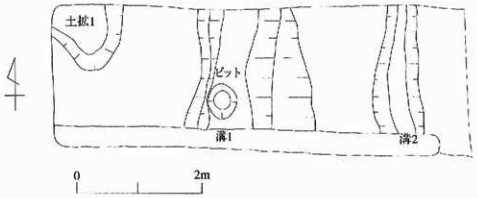
第16図　B地区遺構平面図（S＝1/60）

C地区

第9層上面で中世の溝2条、土壙1基を、溝1底部でピット1個を検出した。

溝1は北方のA地区検出の溝に続くものと思われ，当初幅360cmあったものが埋没していく過程で幅100cmの溝に1度掘り直されていた。掘り直し以前の堆積層は第21図50の土師器皿が出土しており室町時代後期に、掘り直し後の埋土は第4層であることから江戸時代に比定できる。前記落ち込みが若江城の堀として室町時代後期に存在していたなら、溝1はこれに直交するように取り付いて、堀の増水時には城内への氾濫を防ぐために北方向へ排水する機能を果たしたと考えられる。底部で検出した深さ18cmのピットは、溝に架けられた橋に伴うものか。

溝2は幅50～80cm、深さ25cmで南北方向に延び、出土遺物から鎌倉時代頃に使用されたものと思われる。土壙は深さ25cmの不定形で時期は不明。



第17図　C地区遺構平面図（S= 1/60）

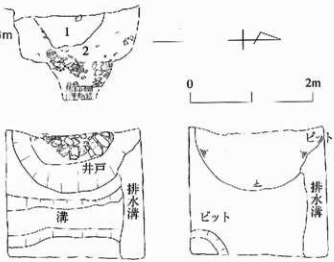
D地区

第9層上面で中世～近世の井戸1基、溝1条、第9層から溝底部で土壙を検出した。

井戸は直径220cmの堀方に、1段目の枠は長辺30cm程度の礫と瓦を42cmの高さ積み上げて、内径60cmの円形にめぐらせていた。2段目と3段目は直径60cm程度の木桶を使用していたが、湧水が激しく完掘して図化することはできなかった。井戸内からは第21図60の備前焼擂鉢の他に伊万里焼碗が出土していることから、室町時代後期～江戸時代に使用されたと思われる。

溝はピットの埋没後に掘り込まれ。幅60～80cm、深さ40cmで南北方向に延びる。A・C地区には続いていなかった。出土遺物から中世に使用されたものと思われる。

ピットは深さ35cmで、出土遺物から中世に使用されたと思われる。



第18図　D地区遺構平面図・井戸断面図（S= 1/60）

4）出土遺物

今回の調査では弥生時代～江戸時代に至る遺物が出土した。以下第19～21図に示した遺物について器種・器形・出土層位を中心に簡潔に記す。

1～24はA地区出土である。

1・2は6段目の井戸枠内から出土した土師器皿で、井戸廃棄時に投

棄されたものと考えられ、遺構の廃没年代を鎌倉時代に比定できる。3は井戸内6段目から出土した和泉型瓦器椀、4・5は井戸掘方から出土した和泉型瓦器椀である。6は4段目の井戸枠に使用されていた土師器羽釜である。

7は溝出土の土師器皿で、溝の使用年代を室町時代後期に比定しうる遺物である。8～12は和泉型瓦器椀で10～12は見込部に平行線状の暗文を持つ。13・14は溝出土の東播系こね鉢、15は溝出土の備前焼擂鉢である。16は溝内出土の貼付突帯をもつ須恵質円筒埴輪で、外面をハケ目、内面をハケ目後ナデで仕上げている。

17・18は須恵器甕、19は須恵器四脚付平瓶、20は須恵器壺、21は須恵器提瓶、22は須恵器台付壺でいずれも第9層から出土した。17～20の出土遺物から第9層の下限を奈良時代に比定できる。23は第9層出土の埴輪で、外面にヘラ状工具による線刻および剥離痕が認められ、家形埴輪の屋根部分に相当するものか。

24は土師器高杯であり、出土した第10層の年代を古墳時代前期に比定できる。

25～49はB地区出土である。

25は唐津焼椀であり出土した第4層を江戸時代に比定できる。26は落ち込み出土の青磁椀で見込部に「福」と陰刻している。27は落ち込み出土の明青花椀で底部に「富貴」を意味する銘がある。28は唐津焼鉢であり落ち込みから出土したことから、遺構の使用年代を江戸時代に比定できる。29～34は土師器皿、35は和泉型瓦器椀でいずれも落ち込みから出土した。36・37は胴部外面をケズリ、内面をハケ目で仕上げた瓦質羽釜。38・39は備前焼擂鉢でそれぞれ落ち込みから出土した。40は落ち込み出土の瓦質風炉で肩部に透かし孔が認められる。41・42は落ち込み出土の巴文軒丸瓦、43は瓦を打ち欠いて作られた落ち込み出土の円盤状土製品である。

44は赤褐色の石材を用いた硯、45は4面を使用した凝灰岩製砥石、46は3面を使用した砥石で焼成を受け表面は赤変している。いずれも落ち込みから出土した。47は2面を使用した片麻岩製砥石で第9層から出土した。

48は土師器壺、49は土師器高杯でそれぞれ第10層から出土した。

50～59はC地区出土である。

50～54は土師器皿、55は和泉型瓦器椀、56は瓦質擂鉢、57は東播系こね鉢でそれぞれ溝1から出土した。50から溝1の使用年代を室町時代後期に比定でき、A地区の溝に連なるものと推測できる。

58は第9層出土の埴輪で内面はナデで仕上げ、外面に線刻、剥離痕が認められる。59は連珠文軒平瓦で第9層上面から出土した。

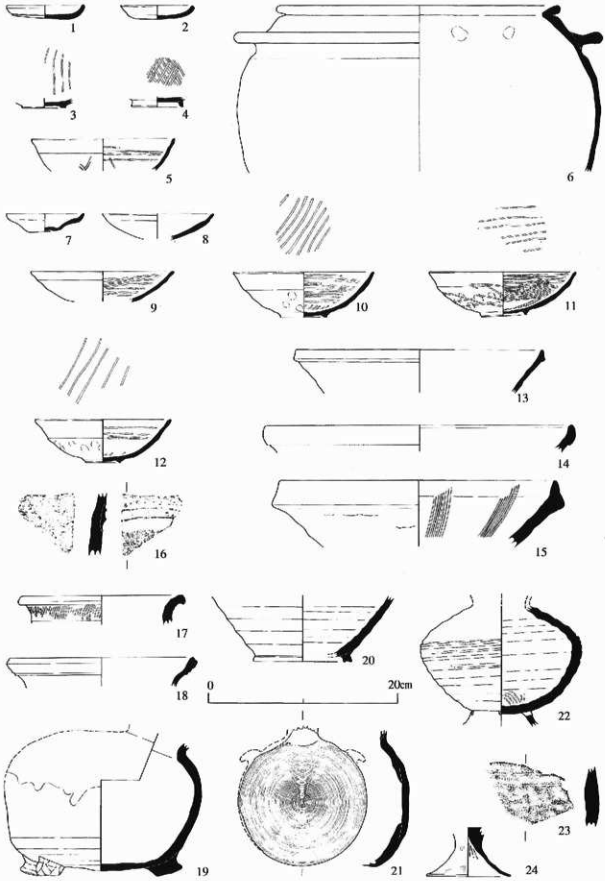
60～63はD地区出土である。

60は備前焼擂鉢で井戸最上段の瓦・石積み枠内埋土から出土した。61は東海系の土師器台付甕で井戸掘方から出土したが、本来は第10層にあったものが井戸掘削時に掘り返されて掘方に埋没したものと思われる。

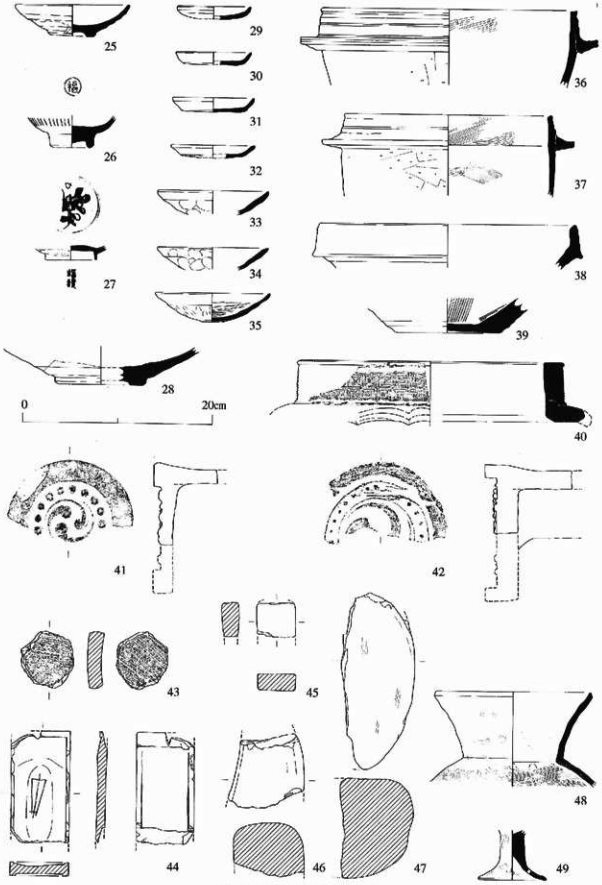
62・63は第10層出土の土師器壺である。

64～66はE地区出土である。

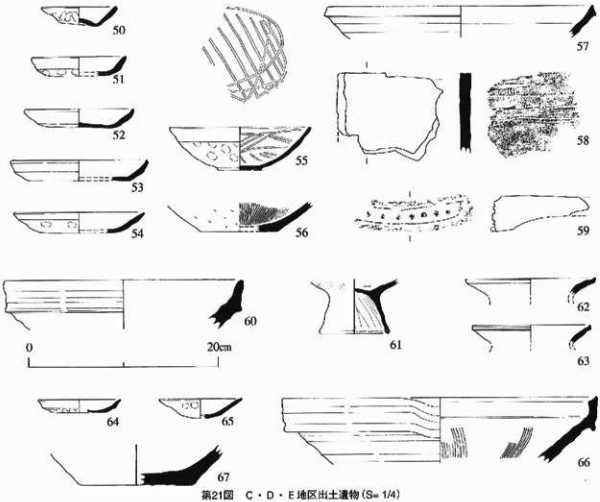
64・65は土師器皿、66は備前焼擂鉢、67は東播系擂鉢でいずれも落ち込みから出土した。



第19図　A地区出土遺物（S= 1/4）



第20図　B地区出土遺物（S= 1/4）



第21図　C・D・E地区出土遺物（S＝1/4）

4　まとめ

本調査地は若江遺跡の北縁にあたるが、鎌倉時代～江戸時代の遺構、弥生時代～江戸時代の遺物を検出できた。

幅６ｍ以上、長さ9.5m以上、深さ１ｍ以上の東西に延びる巨大な近世の落ち込みを検出した。純粋な中世堆積層は確認できなかったものの、その規模から本来は若江城の堀として室町時代から存在していたことが想像される。若江城本丸推定地から北北東に約400m離れていることを考えれば、外堀であった可能性が高く、とりわけ郭内と城下の境界を考える上での手掛かりとなろう。またこの堀には直交する幅４ｍ弱の溝が取り付いており。底部の傾斜から、堀に水を供給するのではなく、増水時には堀の水を北方に排水する役割を果たしたものと思われる。

調査面積が狭小であったにも関わらず鎌倉時代、室町時代後期～江戸時代の井戸を各１基検出した。いずれも古墳時代前期の旧河道内堆積層と思われる第10層まで掘削されていた。この堆積層からは現在も激しい湧水が認められる。本調査地周辺が小字名を「今井」と称する由来は、中世以降この堆積層の水脈に多くの井戸が掘り込まれたことによるものであろう。

遺物では形象埴輪・円筒埴輪が２次堆積ではあるが数点出土している。本調査地から最も近い東方約350mで検出された巨墳１号墳をはじめとし、近年相次ぐ低地部での古墳検出例を考え合わせれば、本調査地周辺に中期～後期の古墳が存在することが推測される。

末尾ではあるが今回の調査にご協力いただいた山野　治氏にお礼申し上げる。
また調査には補助員として関本郁、福山幸一の参加があった。

注)

(1) 西口陽一、宮野淳一、上西美佐子『山賀(その3)』大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター1984
中西靖人、小林義孝、石神幸子他『山賀(その4)』大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター1983

(2) 瀬川健、赤木克視、上西美佐子他『瓜生堂』大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター1984

(3) 上野利明『若江遺跡第29次発掘調査報告』㈶東大阪市文化財協会1989
勝田邦夫『若江遺跡第32・33次発掘調査報告』㈶東大阪市文化財協会1990
勝田邦夫『若江遺跡第35次発掘調査報告』㈶東大阪市文化財協会1988

(4) 金村浩一、曽我恭子、井上伸一「若江遺跡第56次調査概要」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』㈶東大阪市文化財協会1996

(5) 「西岩田遺跡第10次発掘調査概報」『東大阪市文化財協会概報集－1996年度(1)－』㈶東大阪市文化財協会1997

(6) 玉井功、井藤暁子、小野久隆他『巨摩・若江北』大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター1975
山本昭『近大山賀遺跡Ⅱ』近畿大学1989

(7) 原田修、吉村博恵、阿部嗣治「瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報」『㈶東大阪市文化財協会年報1983年度』㈶東大阪市文化財協会1984

(8) 前掲注(2)勝田1990

(9) 『寧楽遺文』中巻

(10) 『続群書類従』八輯下

(11) 『続群書類従』二〇輯上

(12) 竿本隆裕「瓜生堂上層遺跡」『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡』東大阪市遺跡保護調査会1979

(13) 『日本輿地通史畿内部』

(14) 『藤井寺市史紀要』第七集

(15) 以下若江城については、森田恭二『河内守護畠山氏の研究』近代文藝社1993が詳しい

(16) 「1581年4月14日付、パードレ・ルイス・フロイスが都より日本在留の一パードレに送りし書翰」『イエズス会日本年報　上』

(17) 『群書類従』二〇輯上

(18) 前掲注(3)
吉村博恵『若江遺跡第25次発掘調査報告』㈶東大阪市文化財協会1987
才原金弘『若江遺跡第27次発掘調査報告』㈶東大阪市文化財協会1988

(19) 高尾一彦「江戸時代初期の農村構成とその特質」『研究』第16号神戸大学文学会1958

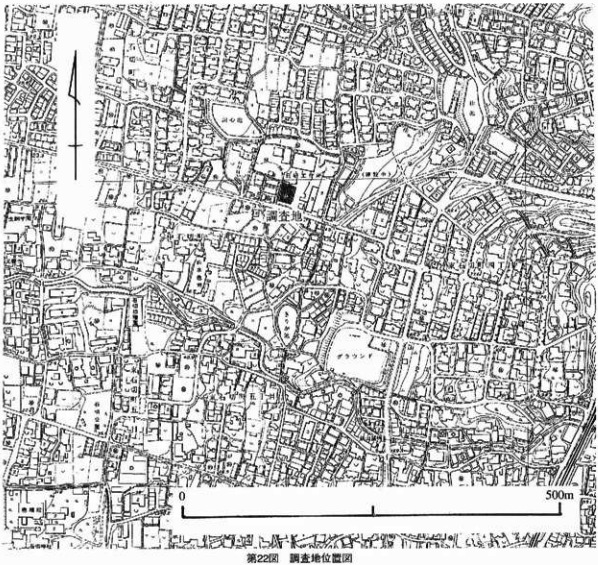
第3章　芝ケ丘遺跡第8次発掘調査概要

1）調査に至る経過

共同住宅の建設に伴って㈱リクルートコスモス関西支社支店長　石井 暁氏より、芝ケ丘遺跡の試掘調査依頼が東大阪市教育委員会文化財課に提出された。試掘調査では調査地の南西側部分において、GL-0.5～-2.0mで土師器片などを含む遺物包含層を検出している。芝ケ丘遺跡内では、以前に第1～7次の調査を実施されている。今回の発掘調査は財団法人東大阪市文化財協会が委託を受け実施した。調査地は東大阪市東石切町5丁目1944-1で、調査面積は211㎡である。現場作業は平成7年6月19日から平成7年8月1日までおこなった。

2）位置と環境

芝ケ丘遺跡は辻子谷によって形成された扇状地の末端に立地する。標高は約20mを測る。今回の調査地は当遺跡の南東端に位置する。（第22図）従前の調査では縄文時代後～晩期の土器、弥生時代後期、古墳時代（5世紀末～6世紀初頭）の遺構・遺物がみつかっている。



第22図　調査地位置図

3）調査の方法

盛り土平均約1.7mを機械掘削し、以下平均0.8m（最浅部0.3m・最深部1.2m）を人力掘削した。

4）層位（第23図）

盛り土層の下で近世遺物包含層、中世遺物包含層、地山層を検出した。

盛土

第1層　明黄褐色（10YR6/8）中粒砂～細粒砂、細礫混じり。鉄分固着。
第2層　にぶい黄褐色（10YR5/4）粗粒砂～細粒砂、礫混じり鉄分、マンガン固着。
第3層　褐灰色（10YR5/4）粗粒砂～粘土、礫混じり。
第4層　褐灰色（10YR4/1）シルト～粘土。
第5層　黒褐色（5YR3/1）中粒砂～粘土、礫含む。
第6層　暗緑灰色（5G5/1）細粒砂～シルト、細礫混じり。鉄分固着。
第7層　灰黄色（2.5Y6/2）中粒砂～極細粒砂、細礫混じり。マンガン固着。
第8層　緑灰色（10G5/1）中粒砂～シルト、細礫混じり。
第9層　不明。
第10層　暗青灰色（5BG3/1）シルト～粘土、細礫混じり。（中世包含層）
第11層　灰色（N6/0）粗粒砂～粘土、大～細礫混じり。
第12層　不明。
第13層　緑黒色（10G2/1）粘土～中粒砂。
第14層　暗緑灰色（5G3/1）細粒砂～粘土、大～細礫混じり。
第15層　青灰色（5BG5/1）　粗粒砂～粘土（地山層）

5）遺構

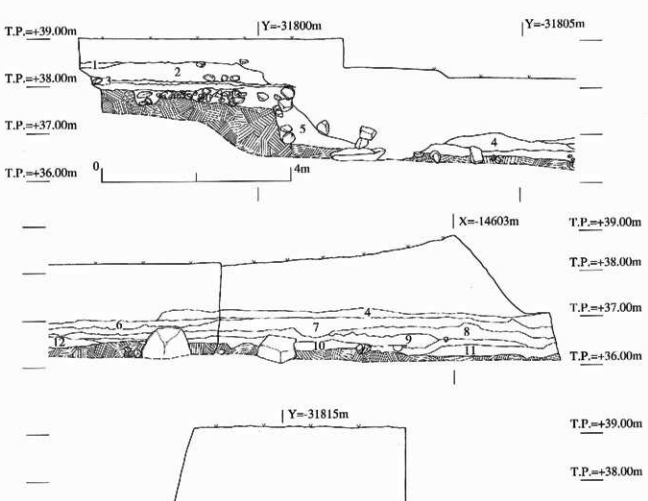
土管裏暗渠を検出した。（第26図）第10層上面の東から西に向かって流れるよう造られている。土管の形態は円筒形で、片方の開口部をもう片方より細くしている。これは佐伯氏（佐伯1994）によって命名されているところのAタイプにあたる。低いほうに土管の受け部、高いほうに差し込み部を置き、それぞれを差し込んで27～28個体を連結している。残存長は約7.8m、残存幅は約0.3mである。土管以外の遺物は出土していない。

石組暗渠と考えられるものが検出した。（第25図）地山層の上面で検出し、東北東から西南西方向に流れるように造られている。明確な蓋石は確認できなかったものの、それに類する石が溝の内外から出土している。残存長は約2.9m、残存幅は約0.8mである。土器などの遺物は出土していない。
これら以外に2基のピットを検出した。

6）遺物

遺物には磁器、土師器、須恵器、瓦器がある。

第28図の1～3は第9層以上から、4～32は第10層から出土した。
1～3は染め付け茶碗の口縁部と底部である。1の外面には子供が描かれている。4～11は瓦器椀である。全体に外面のミガキはまばらで、内面のミガキもやや粗く、口縁端部内面に沈線を施す。9と10に関しては若干口径と幅きに問題がある可能性がある。11は口縁端部内面に強く煙があたっているため外折状を呈する。12と13瓦器皿である。いずれも口縁部を尖らせ気味に外反させる。14は白磁で



第23図　土層断面図

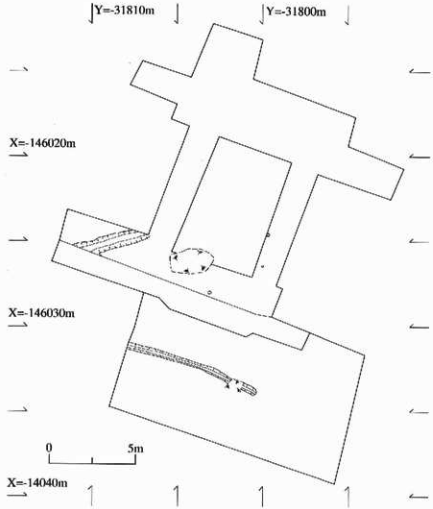
ある。15～22は土師器小皿である。22は口縁端部を外側へ折り返す。23と24は須恵器である。25と26は土師器皿である。27は土師器甕である。28～32は土師器羽釜である。口縁端部を内側に肥厚させるものと外側に肥厚させるものがある。33～34は土管である。いずれも外面をナデ調整する。内面は端部をヘラケズリ調整し、内面中央に布目圧痕を残すものが多い。27～28個体出土しているが、同一性が高い。図示した以外の土管については観察表に示した。

7）まとめ

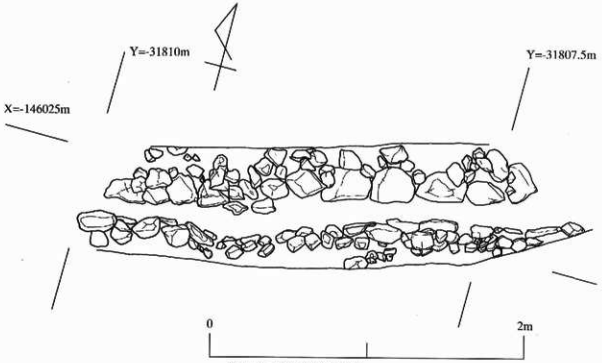
今回の調査区は遺跡の北東端にもかかわらず、遺存状態の良い遺物包含層と遺構を検出した。これは遺跡の範囲の拡大を予想させる。土管暗渠は、小阪遺跡と異なり受け口部を下位においている。また、瓦質土管（暗渠）の画一性は、専門工人の存在を確信させる。今後、今回の調査区周辺での発掘調査に期待したい。

参考文献

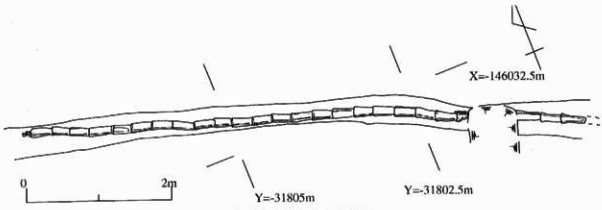
佐伯博光1995「土管考」『文化財学論集』文化財学論集刊行会



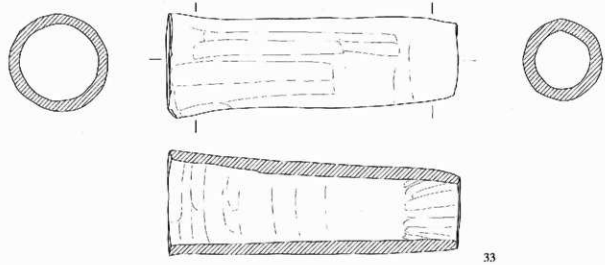
第24図　検出遺構平面図

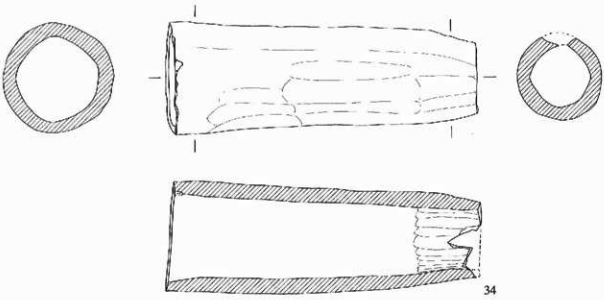


第25図　石組暗渠平面実測図

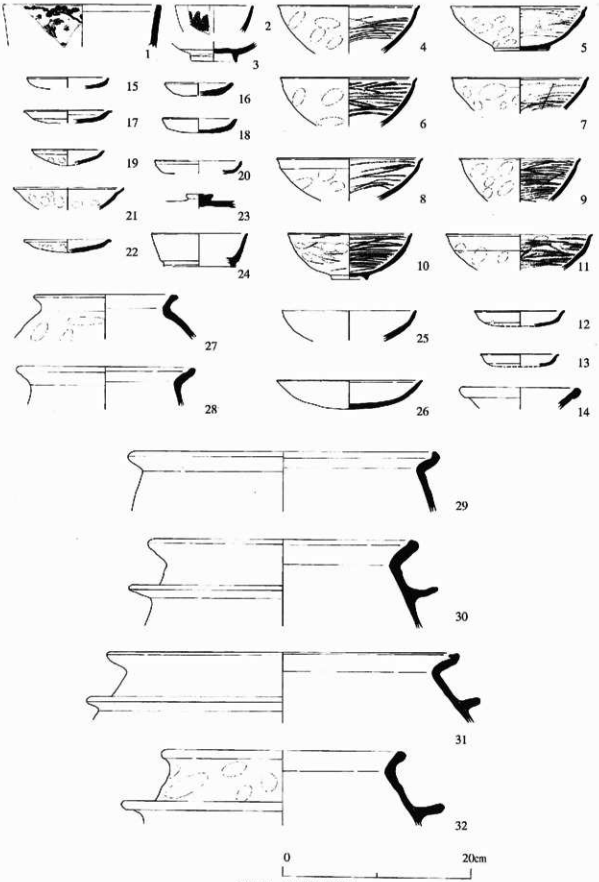


第26図　土管暗渠平面実測図





第27図　土管実測図



第28図　出土遺物実測図

表1　芝ヶ丘遺跡第８次調査出土遺物観察表

番号	遺構・層	種類	器形	法量 (cm) ( ) 復興径,長存高	調整・手法 内面	調整・手法 外面	色調	含有鉱物粒 (mm)	残存度	備考
1	近世包合層	磁器	碗	口径 (16.8) 器高 (4.5) 底径		染付文様	内面 10Y8/1灰色（釉） 外面 断面	精緻	小破片	
2	近世包合層	磁器	碗	口径 (8.2) 器高 (3.0) 底径		染付文様	内面 N8灰色 外面 N8灰色 断面	精緻	小破片	
3	近世包合層	磁器	碗	口径 器高 (1.7) 底径 (4.8)	底部能目釉ハギ	底部無線	内面 10Y8/1灰白色 外面 10Y灰白色 断面	精緻	1/3	
4	中世包合層	瓦器	椀	口径 (15.0) 器高 (5.0) 底径	口縁部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 体部エビオサエ	内面 5BG7/1明青灰色 外面 10G4/1暗青灰色 断面	1.0以下の角閃石・石英・長石	1/5	
5	中世包合層	瓦器	椀	口径 14.4 器高 4.7 底径 5.8	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部ヘラミガキ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部エビオサエ 底部ヨコナデ、ナデ	内面 5B3/1暗青灰色 外面 10GY4/1暗緑灰色 断面	2.0以下の石英・長石	口縁部 3/4	
6	中世包合層	瓦器	椀	口径 (14.4) 器高 (5.1) 底径	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 体部エビオサエ	内面 10GY4/1暗緑灰色 外面 10GY4/1暗緑灰色 断面	2.0以下の石英・長石	1/4	
7	中世包合層	瓦器	椀	口径 (14.6) 器高 (3.5) 底径	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 体部エビオサエ	内面 5BG5/1青灰色 外面 5GY7/1オリーブ灰色 断面	1.0以下の石英・長石・クサリ礫	1/6	
8	中世包合層	瓦器	椀	口径 (15.6) 器高 (4.5) 底径	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 体部エビオサエ	内面 5BG5/1青灰色 外面 5BG5/1青灰色 断面	1.0以下の角閃石・石英・長石	小破片	
9	中世包合層	瓦器	椀	口径 (13.0) 器高 (4.5) 底径	口縁部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部エビオサエ	内面 5B4/1暗青灰色 外面 5B4/1暗青灰色 断面	1.0以下の石英・長石	小破片	
10	中世包合層	瓦器	椀	口径 (13.0) 器高 4.9 底径 (3.7)	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部ヘラミガキ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部エビオサエ後ヘラミガキ 底部ヨコナデ、ナデ	内面 5BG6/1青灰色 外面 10GY5/1緑灰色 断面	1.0以下の角閃石・クサリ礫	1/2	

番号	遺構・層	種類	器形	法量(cm) ( )復原径,残存高	調整・手法		色調	含有鉱物種(mm)	残存度	備考
					内面	外面				
11	中世包含層	瓦器	碗	口径 (15.8) 器高 (3.7) 底径	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部ユビオサエ後ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部ユビオサエ	内面 N3/0暗灰色 外面 5BG4/1暗青灰色 断面	1.0以下の石英・長石	小破片	
12	中世包含層	瓦器	小皿	口径 (9.4) 器高 (1.6) 底径	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	内面 N5/0灰色 外面 N5/0灰色 断面	1.0以下の石英・長石	小破片	
13	中世包含層	瓦器	小皿	口径 (8.2) 器高 (1.35) 底径	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	内面 N5/0灰色 外面 N5/0灰色 断面	0.1以下の石英・長石	1/6	
14	中世包含層	磁器	碗	口径 (11.8) 器高 (2.3) 底径			内面 10Y8/1灰色（釉の色） 外面 10Y8/1灰色（釉の色） 断面	精緻	小破片	
15	中世包含層	土師器	小皿	口径 (8.7) 器高 (1.1) 底径	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	内面 10YR7/2にぶい黄橙色 外面 10YR7/2にぶい黄橙色 断面	1.0以下のクサリ礫・雲母・角閃石	1/6	
16	中世包含層	土師器	小皿	口径 (7.2) 器高 (1.35) 底径	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	内面 2.5Y6/2灰黄色 外面 2.5Y7/2灰黄色 断面	3.0以下の石英・長石・角閃石・雲母	1/3	
17	中世包含層	土師器	小皿	口径 (9.2) 器高 (1.3) 底径	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	内面 7.5YR8/4浅黄橙色 外面 7.5YR8/4浅黄橙色 断面	2.0以下の石英・長石・クサリ礫	1/2	
18	中世包含層	土師器	小皿	口径 (7.8) 器高 (1.5) 底径	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	内面 2.5Y5/2暗灰黄色 外面 2.5Y6/2灰黄色 断面	2.0以下の石英・長石・雲母・角閃石	1/4	
19	中世包含層	土師器	小皿	口径 (7.6) 器高 (1.6) 底径	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	内面 5Y8/2灰白色 外面 5Y8/2灰白色 断面	1.0以下の雲母・角閃石	1/4	
20	中世包含層	土師器	小皿	口径 (9.2) 器高 (1.3) 底径	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	内面 10YR7/3にぶい黄橙色 外面 10YR7/3にぶい黄橙色 断面	3.0以下の石英・長石・雲母・角閃石	1/6	
21	中世包含層	土師器	中皿	口径 (11.6) 器高 (2.3) 底径	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	内面 2.5Y8/2灰白色 外面 2.5Y7/2灰黄色 断面	1.0以下の雲母・クサリ礫・角閃石	1/3	

番号	遺構・層	種類	器形	法量 (cm) ( )は復元現存高	調整・手法		色調	含有鉱物径 (mm)	残存度	備考
					内面	外面				
22	中世包含層	土師器	小皿	口径 (9.2) 器高 (1.4) 底径	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ヘビキリユ	内面 7.5YR8/4 浅黄橙色 外面 7.5YR8/4 浅黄橙色 断面	1.0以下の石英・長石・クサリ礫	1/4	
23	中世包含層	須恵器	坏蓋	口径 器高 (1.25) 底径	ヨコナデ	ヨコナデ	内面 N7/0灰色 外面 5B6/1青灰色 断面	2.0以下の石英・長石・角閃石	小破片	
24	中世包含層	須恵器	坏	口径 (10.0) 器高 (3.5) 底径 (7.6)	口縁部ヨコナデ 体部ヨコナデ 底部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヨコナデ 底部ヨコナデ	内面 7.5GY7/1明緑灰色 外面 5BG7/1明青灰色 断面	3.0以下の石英・長石・角閃石	小破片	
25	中世包含層	土師器	大皿	口径 (14.2) 器高 (3.3) 底径	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	内面 2.5YR8/3淡黄色 外面 7.5YR8/3浅黄橙色 断面	2.0以下の黒母・石英・長石・クサリ礫・角閃石	小破片	
26	中世包含層	土師器	大皿	15.5 3.0 底径	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	内面 5YR6/3にぶい橙色 外面 2.5YR6/6橙色 断面	3.0以下の石英・長石・角閃石・雲母	2/3	
27	中世包含層	土師器	杯蓋	口径 (14.2) 器高 (4.7) 底径	口縁部ヨコナデ、風化の為調整不明	口縁部ヨコナデ、ユビオサエ	内面 10YR6/3にぶい黄橙色 外面 10YR5/3黄褐色 断面	4.0以下の石英・長石・角閃石・クサリ礫	1/6	口縁部外面煤付着
28	中世包含層	土師器	杯蓋	口径 (18.2) 器高 (4.3) 底径	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	内面 2.5Y7/4浅黄色 外面 2.5Y7/4浅黄色 断面	1.0以下の石英・長石・角閃石・雲母・クサリ礫	小破片	
29	中世包含層	土師器	羽釜	口径 (32.0) 器高 (6.4) 底径	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、ナデ	内面 10YR7/3にぶい黄色 外面 10YR7/3にぶい黄橙色 断面	5.0以下の石英・長石・角閃石・雲母	小破片	
30	中世包含層	土師器	羽釜	口径 (27.4) 器高 (9.5) 底径	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヨコナデ	内面 2.5Y5/2暗灰黄色 外面 2.5Y6/2灰黄色 断面	3.0以下の石英・長石・角閃石・雲母	小破片	体部外面煤付着
31	中世包含層	土師器	羽釜	口径 (37.0) 器高 (7.8) 最大径(42.0)	口縁部ヨコナデ 体部ケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ヨコナデ	内面 10YR6/3にぶい黄橙色 外面 10YR7/3にぶい黄橙色 断面	4.0以下の石英・長石・角閃石	小破片	
32	中世包含層	土師器	羽釜	口径 (25.2) 器高 (8.0) 最大径(34.4)	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	口縁部ヨコナデ後ユビオサエ 体部ナデ	内面 7.5YR8/4浅黄橙色 外面 7.5YR8/4浅黄橙色 断面	5.0以下の石英・長石・角閃石・クサリ礫	1/3	

番号	遺構・層	種類	器形	法量 (cm) ( ) 現存値,現存高	調整・手法 内面	調整・手法 外面	色調	含有鉱物種 (mm)	残存度	備考
33	土管1	土管		受部 外径11.0 内径 9.4 器高 30.7 差し込み部 外径 7.5 内径 6.3	受部ケズリ 体部ケズリ、布目痕 差し込み部ケズリ	ナデ	内面 N7/0灰白色 外面 N8/0灰白色 断面	3.0以下の石英・長石・クサリ礫・雲母	完形	法上痕
34	土管0	土管		受部 外径11.7 内径 9.4 器高 32.8 差し込み部 外径(7.8) 内径(6.3)	受部ナデ 体部布目痕、ヘラケズリ 差し込み部ヘラケズリ	ナデ	内面 N5/0灰色 外面 N7/0灰白色 断面	5.0以下の石英・長石・クサリ礫	且は完形	
35	土管2	土管		受部 外径11.5 内径 9.4 器高 31.7 差し込み部 外径 7.6 内径 5.7	受部ナデ 体部布目痕、ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N4/0灰色 外面 N8/0灰白色 断面	4.0以下の石英・長石	完形	
36	土管3	土管		受部 外径12.0 内径 8.4 器高 32.4 差し込み部 外径 8.3 内径 6.7	受部ナデ 体部布目痕 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N4/0灰色 外面 N8/1灰白色 断面	4.0以下の石英・長石	完形	
37	土管4	土管		受部 外径(12.0) 内径 (8.9) 器高 (18.7)	受部ナデ 体部布目痕	ナデ	内面 N3/0暗灰色 外面 N8/0灰白色 断面 2.5Y7/1灰白色	3.0以下の石英・長石・クサリ礫	1/3	
38	土管5	土管		受部 外径12.0 内径 9.5 器高 30.7 差し込み部 外径 7.4 内径 6.3	受部ナデ 体部布目痕、ケズリ 差し込み部ケズリ、ナデ	ナデ	内面 N4/0灰色 外面 N4/0灰色 断面	4.0以下の石英・長石	完形	
39	土管6	土管		受部 外径12.6 内径10.2 器高 30.9 差し込み部 外径 7.7 内径 6.3	受部ナデ 体部布目痕、ナデ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 5Y2/1黒色 外面 5Y2/1黒色 断面	2.0以下の石英・長石・クサリ礫	完形	
40	土管8	土管		受部 外径11.0 内径 8.5 器高 31.7 差し込み部 外径 7.5 内径 6.4	受部ナデ 体部ナデ、ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N7/0灰白色 外面 N7/0灰白色 断面 7.5Y7/1灰白色	4.0以下の石英・長石・クサリ礫	完形	
41	土管9	土管		受部 外径11.4 内径 9.2 器高 31.9 差し込み部 外径 7.4 内径 6.1	受部ナデ 体部布目痕 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N4/0灰色 外面 N7/1灰白色 断面	2.0以下の石英・長石・クサリ礫・雲母	完形	
42	土管10	土管		受部 外径11.1 内径 9.6 器高 30.8 差し込み部 外径 8.2 内径 6.8	受部ナデ 体部布目痕 差し込み部ナデ	ナデ	内面 10Y6/1灰色 外面 10Y7/1灰白色 断面	3.0以下の石英・長石	完形	
43	土管11	土管		受部 外径11.5 内径 9.0 器高 29.8 差し込み部 外径 7.6 内径 6.5	受部ナデ 体部布目痕 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N3/0暗灰色 外面 N7/0灰白色 断面	1.0以下の石英・長石	完形	

番号	遺構・層	種類	器形	法量 (cm) ( ) 復原値,現存高	調整・手法		色調	含有鉱物粒 (mm)	残存度	備考
					内面	外面				
44	土管12	土管		受部 外径12.2 内径 9.6 器高 31.5 差し込み部 外径 8.3 内径 6.4	受部ナデ 体部布目板、ナデ、 ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N6/0灰色 外面 N8/0灰白色 断面	4.0以下の石英・長石・クサリ礫	ほぼ完形	
45	土管13	土管		受部 外径11.5 内径 9.1 器高 30.8 差し込み部 外径 7.3 内径 6.3	受部ナデ 体部布目板、ナデ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 外面 10Y7/1灰白色 断面 N4/0灰色	4.0以下の石英・長石	完形	
46	土管14	土管		受部 外径10.1 内径 8.6 器高 31.0 差し込み部 外径 7.2 内径 6.4	受部ナデ 体部布目板、裾いナデ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N3/0青灰色 外面 N3/0青灰色 断面	1.5以下の石英・長石・雲母	完形	
47	土管15	土管		受部 外径11.9 内径 9.4 器高 30.6 差し込み部 外径 7.2 内径 5.9	受部ナデ 体部ナデ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N3/0青灰色 外面 N7/0灰白色 断面	3.0以下の石英・長石	完形	
48	土管16	土管		受部 外径11.4 内径 9.4 器高 30.2 差し込み部 外径 7.8 内径 6.7	受部ナデ 体部布目板、ナデ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N4/0灰色 外面 10Y7/1灰白色 断面	2.0以下の石英・長石・雲母	完形	
49	土管17	土管		受部 外径11.6 内径 9.4 器高 31.0 差し込み部 外径 8.0 内径 6.5	受部ナデ 体部布目板、裾いナデ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N3/0青灰色 外面 10Y6/1灰色 断面	2.0以下の石英・長石・雲母	完形	
50	土管18	土管		受部 外径11.8 内径 9.2 器高 30.0 差し込み部 外径 7.7 内径 6.6	受部ナデ 体部布目痕 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N4/0灰色 外面 N4/0灰色 断面	2.0以下の石英・長石	完形	
51	土管19	土管		受部 外径10.7 内径 9.1 器高 31.6 差し込み部 外径 7.1 内径 6.0	受部ナデ 体部布目痕 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N4/0灰色 外面 N5/0灰色 断面	2.0以下の石英・長石・雲母	完形	
52	土管20	土管		受部 外径11.6 内径 9.2 器高 31.8 差し込み部 外径 7.4 内径 6.6	受部ナデ 体部布目痕、ナデ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N3/0青灰色 外面 N7/0灰白色 断面	6.0以下の石英・長石	完形	
53	土管21	土管		受部 外径10.8 内径 9.0 器高 29.5 差し込み部 外径 8.1 内径 6.6	受部ナデ、ケズリ 体部布目痕、ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N2/0黒色 外面 N8/0灰白色 断面	3.0以下の石英・長石	完形	
54	土管22	土管		受部 外径11.4 内径 8.9 器高 31.8 差し込み部 外径 7.7 内径 6.0	受部ナデ 体部布目痕、ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 10YS/1灰色 外面 10Y6/1灰色 断面	2.5以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	完形	

番号	遺構・層	種類	器形	法量 (cm) ( )復元値,現存高	調整・手法 内面	調整・手法 外面	色調	含有鉱物粒 (mm)	残存度	備考
55	土管23	土管		受部 外径11.2 内径 9.0 器高 31.1 差し込み部 外径 7.3 内径 6.1	受部ナデ 体部布目痕、ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N3/0暗赤灰色 外面 7.5Y7/1灰白色 断面	2.0以下の石英・長石	完形	
56	土管24	土管		受部 外径10.9 内径 9.2 器高 30.4 差し込み部 外径 7.2 内径 6.1	受部ナデ 体部布目痕、ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N2/0黒色 外面 7.5YR7/1灰白色 断面	0.1以下の石英・長石	完形	
57	土管25	土管		受部 外径10.8 内径 8.8 器高 31.1 差し込み部 外径 7.8 内径 6.2	受部ナデ 体部布目痕、ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N4/0灰色 外面 10Y6/1灰色 断面	2.5以下の石英・長石	完形	
58	土管25	土管		受部 外径12.0 内径 9.4 器高 32.0 差し込み部 外径 8.4 内径 6.5	受部ナデ 体部布目痕、ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 7.5Y2/1黒色 外面 10Y7/1灰白色 断面	2.5以下の石英・長石	完形	
59	土管26	土管		受部 外径(10.6) 内径 (7.8) 器高 (29.8) 差し込み部 外径 7.6 内径 6.8	受部ナデ 体部布目痕、ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 5Y7/3浅黄色 外面 5Y5/1灰色 断面	2.5以下の石英・長石	4/5	
60	土管26	土管		受部 器高 (11.1) 差し込み部	受部ナデ 体部ナデ	ナデ	内面 N4/0灰色 外面 N4/0灰色 断面 N8/0灰白色	1.0以下の石英・長石	1/6	
61	土管26	土管		受部 器高 (9.4) 差し込み部	体部ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N3/0暗灰色 外面 N4/0灰色 断面 N8/0灰白色	1.0以下の石英・長石	小破片	
62	土管26	土管		受部 器高 (10.3) 差し込み部	体部ナデ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N3/0暗灰色 外面 N3/0暗灰色 断面 N8/0灰白色	2.0以下の石英・長石	小破片	
63	土管25	土管		受部 器高 (8.0) 差し込み部	体部ケズリ 差し込み部ナデ	ナデ	内面 N4/0灰色 外面 N4/0灰色 断面 N7/0灰白色	1.0以下の石英・炭石・クサリ礫	小破片	
64	土管26	土管		受部 器高 (6.4) 差し込み部	受部ナデ	ナデ	内面 N4/0灰色 外面 N4/0灰色 断面 N8/0灰白色	1.0以下の石英・長石	小破片	

図　　版

図版1　若江遺跡第59次調査

1．南北堀東肩部
（築造時）
（南西から）

2．南北堀東肩部
（築造時）
（北から）

3．南北堀東肩部
（築造時）
（西から）

図版2　若江遺跡第59次調査

4．土橋
（築造時）
（東から）

5．土橋
（築造時）
（東から）

6．現地説明会風景
建物は若江小学校
（北から）

7．南北堀東肩部
（廃絶時）
（北西から）

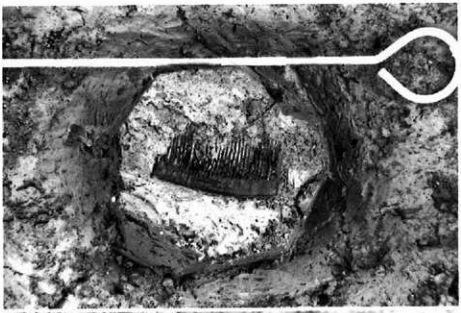
8．肩部細部
（廃絶時）
（北から）

9．南北堀中央部
（廃絶時）
（南東から）

10. 南北堰東肩部
（廃絶時）
（西から）

11. 南北堰東肩部細部
（廃絶時）

12. 南北堰東肩部
（廃絶時）
折敷出土状況



13. 南北堀東肩部
（廃絶時）
櫛出土状況

14. 南北堀東肩部
（廃絶時）
曲物出土状況

15. 南北堀東肩部
（廃絶時）
かけや？出土状況

16. 南北堀東肩部
（廃絶時）
壁下地出土状況

17. 南北堀東肩部
（廃絶時）
むしろ状製品
出土状況

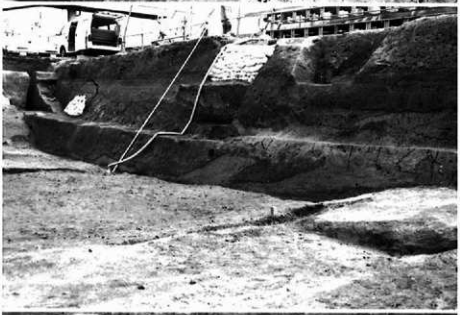
18. 南北堀東肩部
（廃絶時）
軒丸瓦出土状況

19. 南北堀東肩部
（廃絶時）
軒平瓦出土状況

20. 南北堀東肩部
（廃絶時）
土師皿出土状況

21. 南北堀東肩部
（廃絶時）
土師皿出土状況

22. 堀内堆積層中
自然木出土状況



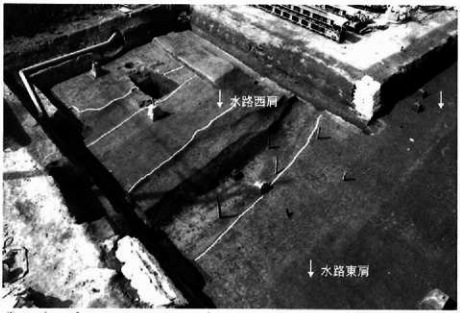
23. 堀南壁断面

24. 堀南壁断面
東肩部

25. 調査区西部
調査風景
（北から）

26. 調査区西部
SD01・SE01
南北堀西肩

27. SE01上部断面
（南から）



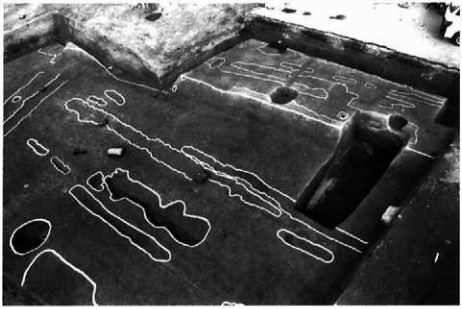
28. 耕作面下面西部
及び水路検出状況

29. 堀内近世堆積層中
瓦集中部
（北から）

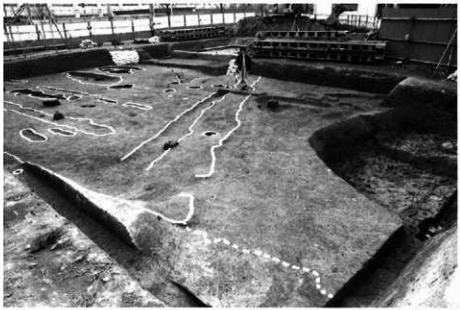
30. 耕作面下面東部
（南から）

31. 耕作面下面
畦畔
（東から）

32. 耕作面下面
耕作根の溝



33. 耕作面上面東部
（南西から）



34. 耕作部上面北部（東から）

35. 近現代面（東から）

36. 防空壕正面（西から）

37. 調査区東部中世遺構群（南から）

38. SE02上部（東から）

39. SE02下部（北から）

40. SE03下部（北から）

41. SE04上部（南から）

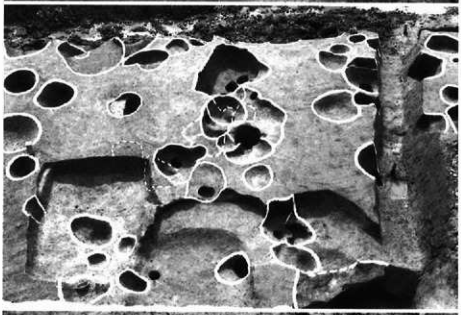
42. SE05下部（北から）

43．SE05上部断面
（西から）

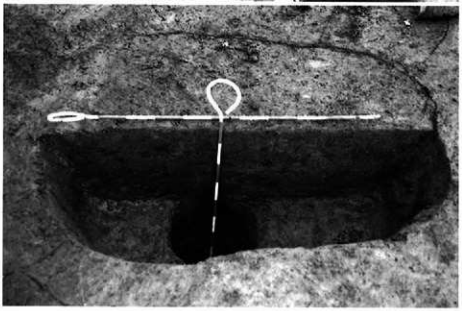
1．南北堀東肩部
（築造時）
（南西から）

44．古代道構群
（東から）

45. 古代遺構群
（北から）



46. 古代遺構群
中央部（東から）



47. 古代遺構群
柱穴断面

48. 柱穴内
土器出土状況
（南から）

49. 柱穴内
土器出土状況

50. 弥生後期水田
（北から）

51. 弥生後期
水田畦畔
（西から）

52. 弥生後期
SD02
（西から）

53. SD02内足痕

1．A地区北壁断面

2．A地区遺構全景

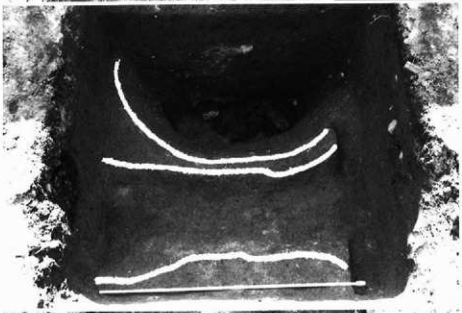
3．A地区井戸

4．A地区井戸内遺物出土状況

5．B地区東壁断面

6．B地区落込み

7．C地区遺構全景



8．D地区遺構全景

9．D地区井戸
実測風景

図版22　若江遺跡第60次調査出土遺物

1

2

6

11

7

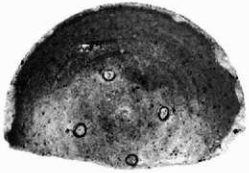
19

21

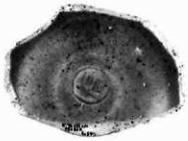
土師器皿・羽釜・瓦器椀・須恵器提瓶・平瓶

22

24



25



26

25′

26′

25″

26″

A地区出土　須恵器台付壺・肥前陶器椀・青磁碗・土師器高杯

図版24　若江遺跡第60次調査出土遺物

27

27′

28

28′

28″

41

42

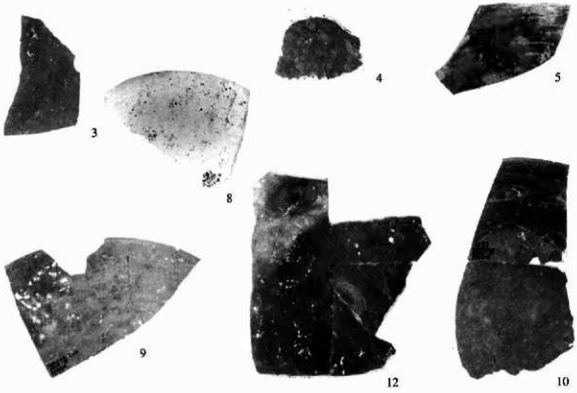
50

52

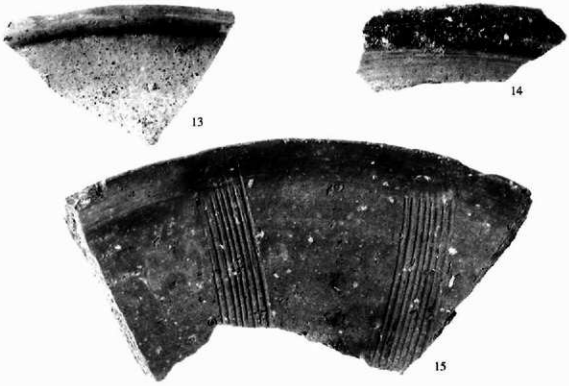
59

61

中国製青花・肥前陶器・軒丸瓦・軒平瓦・土師器皿・台付瓷脚台
1．南北堀東肩部



1．瓦器椀



2．擂鉢・こね鉢

図版26　若江遺跡第60次調査出土遺物

16

23

58

1．円筒埴輪・形象埴輪

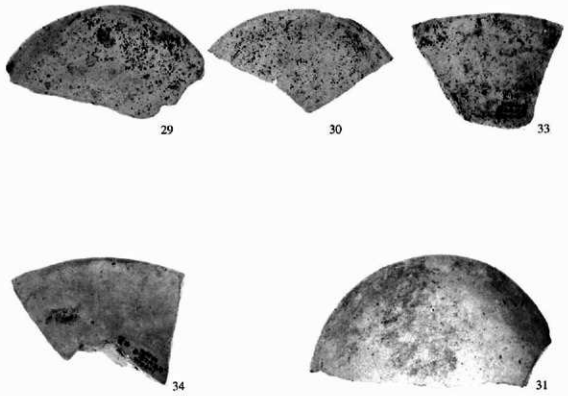
17

18

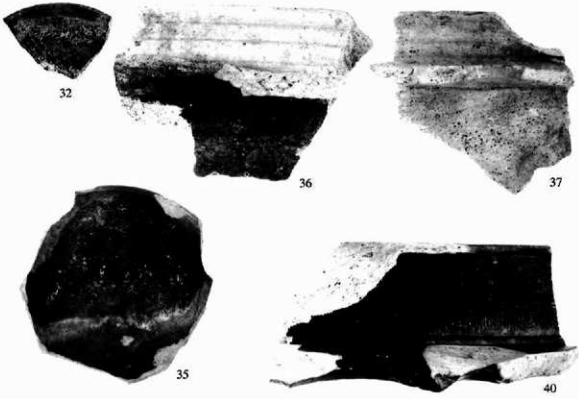
20

2．須恵器壺・甕

図版27　若江遺跡第60次調査出土遺物

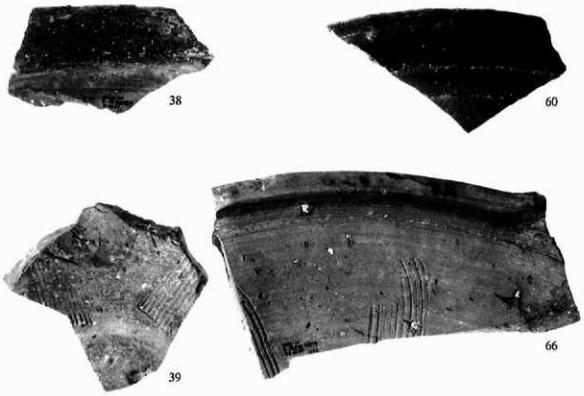


1．土師器皿

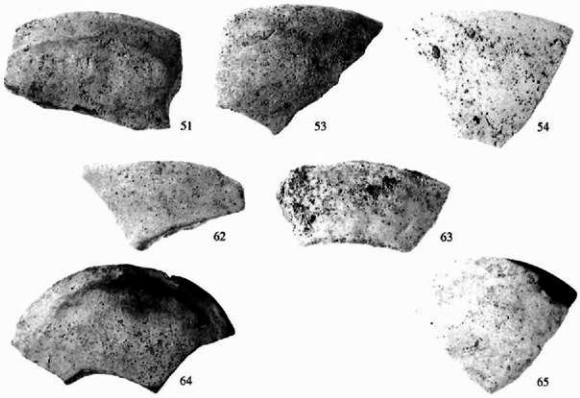


2．瓦器皿・羽釜

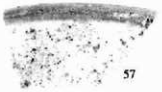
図版28　若江遺跡第60次調査出土遺物



1．擂鉢



2．土師器皿・甕

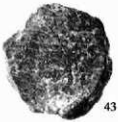

57

56

55

67

1．擂鉢・こね鉢・瓦器椀


43

44

45

46

47

2．砥・砥石・円盤状土製品

図版30　芝ヶ丘遺跡第8次調査

1．調査地全景
（北から）

2．調査地全景
（東から）

3．調査風景

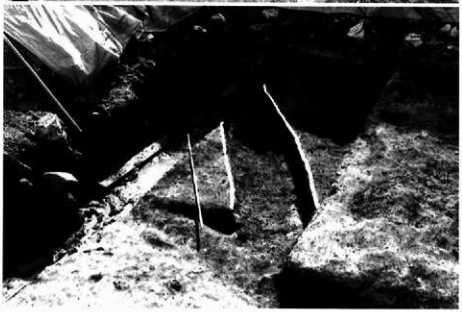
1．西壁断面

2．南壁断面

3．西壁断面

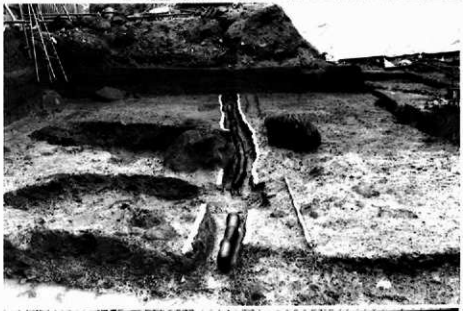
1．石組暗渠
（東から）

2．石組暗渠
（東から）

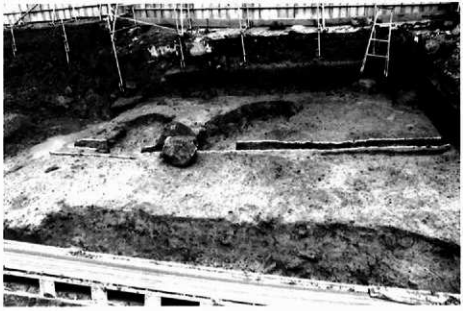


3．石組暗渠
（石組抜取後）

1．土管暗渠上面
（東から）

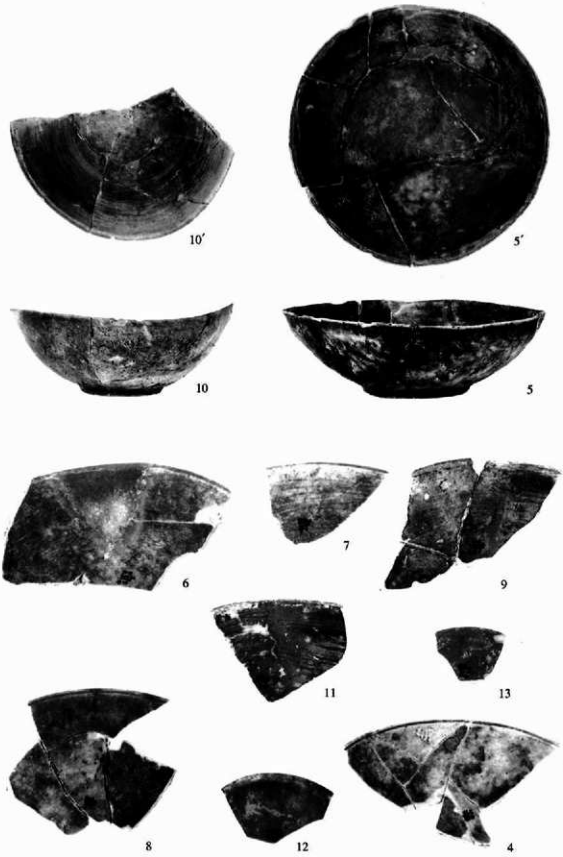


2．土管暗渠



3．土管暗渠
（北から）

図版34　芝ヶ丘遺跡第8次調査出土遺物



瓦器椀

18

26

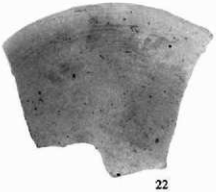
17

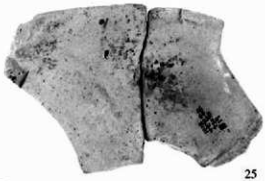
32

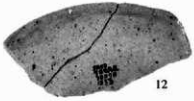
19

34

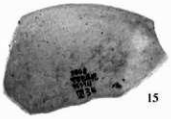
21


22


25

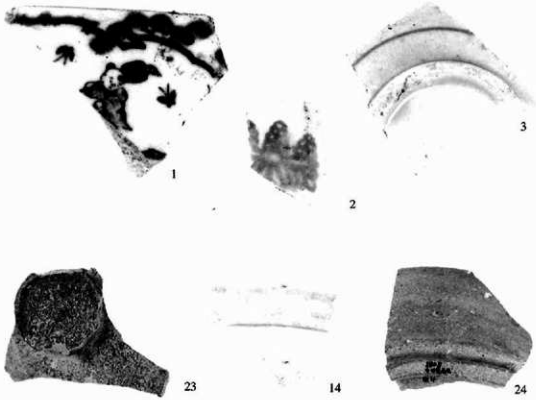

12

16

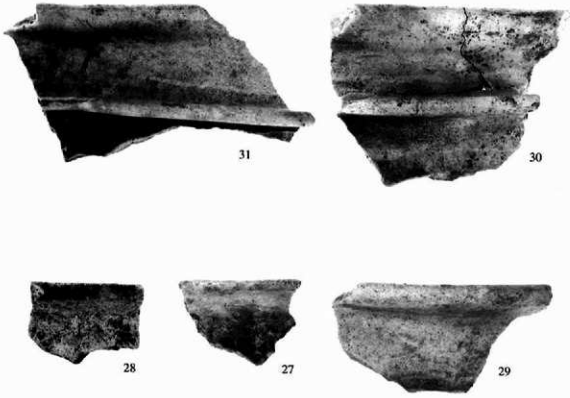

15

土師器皿・羽釜・土管

図版36　芝ヶ丘遺跡第8次調査出土遺物



1．磁器碗・須恵器坏・蓋



2．羽釜

報告書抄録

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいよう
書名	東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 －1995年度調査(2)－
副書名	Ⅰ若江遺跡(第59次調査) Ⅱ若江遺跡(第60次調査) Ⅲ芝ヶ丘遺跡(第8次調査)
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	Ⅰ金村浩一 Ⅱ井上伸一 Ⅲ藤城泰
編集機関	財団法人 東大阪市文化財協会
所在地	〒577 東大阪市荒川3丁目28−21
発行年月日	西暦1997.3.31

ふりがな 所在遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
Ⅰ若江遺跡(わかえ) (第59次調査)	ひがしおおさかしわかえきたまち 東大阪市若江北町3丁目57番地他	27227				19950220 ～ 19950522	507㎡	マンション建設
Ⅱ若江遺跡(わかえ) (第60次調査)	ひがしおおさかしわかえきたまち 東大阪市若江北町3丁目57番地他	27227				19950517 ～ 19950608	84㎡	マンション建設
Ⅲ芝ヶ丘遺跡(しばがおか) (第8次調査)	ひがしおおさかしいしきりちょう 東大阪市石切町5丁目1944−1番地	27227				19950619 ～ 19950801	211㎡	マンション建設

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要
－1995年度調査(2)－
発行　財団法人　東大阪市文化財協会
東大阪市荒川3丁目28－21
TEL (06)736－0346
印刷　株式会社アズマ